

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXII

泉南市文化財調査報告書 第四十四集

2005. 3

泉南市教育委員会

序 文

泉南市は大阪府南部に位置し、大阪湾や和泉山脈に囲まれ、一年を通して温暖な気候条件を有する豊かな自然環境に恵まれています。このため、市内には先人たちの営みによって残された数多くの遺跡が存在しています。

しかしながら近年の著しい都市化により、その姿は大きく変貌しようとしています。それは私たちの日々の生活を物質的に豊かにし、格段に暮らしやすいものとなりました。一方、はるか昔から残されてきた郷土の豊かな自然や景観を大きく変化させ、貴重な歴史遺産が破壊の危機にさらされていることも事実です。

本市ではこれら先人の残した貴重な歴史遺産を保護し、未来に伝えていくという重要な責務を果たすため、緊急発掘調査を行い、本書によっていち早くその成果を公表させていただいております。これにより本市の持つ豊かな歴史情報の一端に触れて頂ければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力頂きました地元土地所有者、近隣住民の皆様、並びに関係諸機関の方々には、深く感謝の意を述べさせていただきますと同時に、今後とも本市の文化財行政により一層のご理解、ご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平成17年3月

泉南市教育委員会
教育長 梶本邦光

例 言

1. 本書は、泉南市教育委員会が平成16年度国庫補助事業として計画し、生涯学習課が実施した泉南市遺跡群の緊急発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、泉南市教育委員会生涯学習課、石橋広和・城野博文・河田泰之を担当者とし、平成16年4月1日に着手し、平成17年3月31日に終了した。なお、本書に掲載している内容は、平成16年1月1日から平成16年12月31日までのものである。
3. 現地調査及び整理の実施にあたっては江尻美代子、蒲生徹幸、蔵田弘幸、富 愛、藤野 渉、真鍋紀美子諸君らの協力を得た。
4. 本書の執筆は石橋・城野・河田が行い、編集は城野が行った。執筆の分担は目次に記した。
5. 現地調査における写真撮影は各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は城野が行った。
6. 調査における出土遺物及び図面、写真などの諸記録は、泉南市埋蔵文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを望むものである。

凡 例

1. 各調査区には個別の番号を付した。番号の構成は、「遺跡略称-調査年度-通し番号」である。遺跡略称は、男里遺跡-ON、戎畑遺跡-EB、幡代遺跡-HT、岡中遺跡-OK、上代石塚遺跡-JD、座頭池遺跡-ZT、中小路西遺跡-NKW、岡田西遺跡-OKDW、新伝寺遺跡-SDJ、北野遺跡-KT、一岡神社遺跡-IOJ、海会寺跡-KAIである。調査年度は西暦の上位2桁を省略して表記している。
2. 図中の方位は、PL.1・2では真北を、各調査区位置図・地形図では国土座標VI系にもとづく座標北を、各調査区平面図では磁北をあらわしている。
3. 図版中に示したレベル高は、T.P.+(m)の数値を使用しているが、T.P.+は省略している。
4. 本書で扱う地形分類図は、豊田兼典氏が作成した。(PL.2)
5. 遺構名称は、遺構の種類を表すアルファベットと任意の数値の組合せで表記している。遺構の種類はSE-井戸、SB-掘立柱建物、SK-土坑、SX-性格不明遺構、Pit-柱穴である。
6. 図示した遺物の断面は、土師器-白抜き、須恵器-黒塗りのように区分している。
7. 出土遺物の番号は、遺跡毎に通し番号を付した。遺物実測図と写真図版において遺物番号は統一している。

目 次

第1章 調査の経過	(石橋)	1
第2章 男里遺跡の調査		4
第1節 既往の調査	(城野)	4
第2節 04-1区の調査		6
第3節 04-2区の調査		6
第4節 04-3区の調査		7
第5節 04-4区の調査		7
第6節 03-8区の調査	(河田)	8
第3章 戎畑遺跡の調査	(城野)	10
第1節 既往の調査		10
第2節 04-1区の調査		10
第4章 幡代遺跡の調査	(城野)	12
第1節 既往の調査		12
第2節 04-1区の調査		13
第3節 04-2区の調査		14
第4節 04-3区の調査		15
第5節 04-4区の調査		15
第5章 岡中遺跡の調査	(城野)	17
第1節 既往の調査		17
第2節 04-1区の調査		18
第6章 中小路西遺跡の調査	(城野)	20
第1節 既往の調査		20
第2節 04-1区の調査		21
第7章 岡田西遺跡の調査	(城野)	22
第1節 既往の調査		22
第2節 04-1区の調査		22
第8章 新伝寺遺跡・北野遺跡の調査	(城野)	23
第1節 既往の調査		23
第2節 04-1区の調査		24
第9章 一岡神社遺跡の調査	(城野)	28
第1節 既往の調査		28
第2節 04-1区の調査		28
第10章 海会寺跡の調査		29
第1節 既往の調査	(城野)	29
第2節 04-1区の調査	(河田)	29

第11章 まとめ	(城野)	30
報告書抄録		巻末

挿 図 目 次

第1図	男里遺跡調査区位置図	5
第2図	男里遺跡04-1区・04-2区地形図	6
第3図	男里遺跡04-3区地形図	7
第4図	男里遺跡04-4区地形図	8
第5図	男里遺跡03-8区地形図	8
第6図	戎畑遺跡調査区位置図	10
第7図	戎畑遺跡04-1区地形図	11
第8図	幡代遺跡調査区位置図	12
第9図	幡代遺跡04-1区地形図	13
第10図	男里遺跡・幡代遺跡出土遺物	13
第11図	幡代遺跡04-2区・04-3区地形図	14
第12図	幡代遺跡04-4区地形図	15
第13図	岡中遺跡調査区位置図	17
第14図	岡中遺跡04-1区地形図	18
第15図	上代石塚遺跡調査区位置図	19
第16図	中小路西遺跡・岡田西遺跡・座頭池遺跡調査区位置図	20
第17図	中小路西遺跡04-1区地形図	21
第18図	岡田西遺跡04-1区地形図	22
第19図	新伝寺遺跡・北野遺跡・一岡神社遺跡・海会寺跡調査区位置図	23
第20図	新伝寺・北野遺跡04-1区地形図	24
第21図	新伝寺・北野遺跡出土遺物	27
第22図	一岡神社遺跡04-1区地形図	28
第23図	海会寺跡04-1区地形図	29

表 目 次

第1表	平成16年発掘および試掘調査届出一覧表	1
第2表	発掘調査一覧表	2
第3表	試掘調査一覧表	3
第4表	立会調査一覧表	3
第5表	文化財一覧表	32

図 版 目 次

- P L. 1 泉南地域の文化財
- P L. 2 泉南地域の地形分類
- P L. 3 男里遺跡、戎畑遺跡、幡代遺跡、岡中遺跡、中小路西遺跡調査区
- P L. 4 岡田西遺跡、新伝寺・北野遺跡①、一岡神社遺跡、海会寺跡調査区
- P L. 5 新伝寺・北野遺跡調査区②
- P L. 6 男里遺跡04-1・2・3区
- P L. 7 男里遺跡04-4・03-8区、戎畑遺跡04-1区
- P L. 8 幡代遺跡04-1・2・3区
- P L. 9 幡代遺跡04-4区、岡中遺跡04-1区、中小路遺跡04-1区
- P L. 10 岡田西遺跡04-1区、一岡神社遺跡04-1区、海会寺跡04-1区
- P L. 11 新伝寺・北野遺跡04-1区
- P L. 12 男里遺跡03-8区、幡代遺跡04-1・2区、新伝寺・北野遺跡04-1区出土遺物

泉南市遺跡群発掘調査報告書 XXII

第1章 調査の経過

泉南市における発掘・試掘届出等の件数は、関西国際空港建設等に伴う大規模開発が行われた時期と比べると、この数年は減少、横ばい傾向であったが、本年はともに増加に転じている。特にバブル経済崩壊以降、手付かずであった地域にも開発が進み、これらに伴う比較的大規模な調査が増加している。

このような状況下、今年度は第2表のとおり発掘調査が行われた。このうち本文中において報告するのは10遺跡、16件である。以下、それぞれの遺跡毎に調査の経過を述べる。

第1表 平成16年発掘および試掘調査届出一覧表

平成16年12月31日現在

年 月	発 掘		試 掘		合 計	
	件数	面積 (㎡)	件数	面積 (㎡)	件数	面積 (㎡)
16年・1	1	459.00	0	0.00	1	459.00
2	2	540.65	8	45,023.80	10	45,564.45
3	3	2,565.67	3	39,280.96	6	41,846.63
4	13	16,710.01	2	985.84	15	17,695.85
5	6	1,213.64	3	6,737.65	9	7,951.29
6	2	528.78	1	481.57	3	1,010.35
7	5	4,341.55	4	8,230.40	9	12,571.95
8	4	2,832.22	3	4,380.37	7	7,212.59
9	2	547.12	2	1,154.23	4	1,701.35
10	6	22,698.63	1	3,646.41	7	26,345.04
11	1	685.58	4	14,792.02	5	15,477.60
12	2	168.75	1	463.36	3	632.11
合 計	47	53,291.60	32	125,176.61	79	178,468.21

男里遺跡は市域北西部、男里川右岸の沖積地に立地する。今年度は現男里集落内を中心に4件の調査が行われた。また東縁辺部に位置する昨年度未報告の1件もあわせて報告している。

戎畑遺跡は男里遺跡の北に位置する。平成8年度に遺跡南半部において大規模な区画整理が実施され、以降区画内での調査が継続的に行われている。本年度は1件の調査が行われた。

幡代遺跡は金熊寺川右岸の現幡代集落を中心とする遺跡である。集落内の住宅建替等で継続的に調査が行われている。今年度は集落内の調査3件のほか遺跡北端の確認調査も報告している。

岡中遺跡は幡代遺跡の南西にある。平成2年度以降、現岡中集落内を中心に継続的に調査が行われてきた。今年度は現集落から若干はずれた北東部で1件の調査が行われた。

中小路西遺跡は市域中心部の段丘上に立地する。平成2年度に分布調査で周知され、これまで数件の調査が行われている。今年度は遺跡のほぼ中心で1件の調査が行われた。

岡田西遺跡は中小路西遺跡の北西に隣接する。平成元年度に都市計画道路建設に伴う試掘調査において周知された。今年度は遺跡南西縁辺部で1件の調査が行われた。

北野遺跡は洪積段丘東縁部に立地する。また新伝寺遺跡は、平成2年度に店舗建設に伴う試掘調査で周知された遺跡である。本年度は両遺跡にまたがる地域で調査が行われた。

一岡神社遺跡は、地目や地形的な制約から調査はおろか届出もほとんど行われていない遺跡であった。今年度は西側の段丘端部において初めて調査が行われた。

海会寺跡は本市の代表的な遺跡であり、中心部分のある一岡神社境内は国史跡に指定されている。今年度は寺域西側の丘陵上において調査が行われた。

第2表 発掘調査一覧表

平成16年12月31日現在

No.	遺跡名	地区名	位置	面積 (㎡)	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	04-1区	男里	184.05	個人住宅	16年7月	本書掲載 ⑬-21
2	男里遺跡	04-2区	男里	333.04	個人住宅	16年5月	同上 ⑬-5
3	男里遺跡	04-3区	男里	344.73	個人住宅	16年7月	同上 ⑬-20
4	男里遺跡	04-4区	男里	218.43	個人住宅	16年6月	同上 ⑬-10
5	男里遺跡	03-8区	馬場	459.00	個人住宅	16年1月	同上 ⑮-28
6	戎畑遺跡	04-1区	樽井	164.87	個人住宅	16年8月	同上 ⑬-23
7	幡代遺跡	04-1区	幡代	229.96	個人住宅	16年5月	同上 ⑬-19
8	幡代遺跡	04-2区	幡代	495.52	個人住宅	16年8月	同上 ⑬-29
9	幡代遺跡	04-3区	幡代	605.30	個人住宅	16年11月	同上 ⑬-35
10	幡代遺跡	04-4区	幡代	3747.01	宅地造成	16年5月	本書掲載(確認調査) ⑬-13
11	岡中遺跡	04-1区	信達岡中	334.64	個人住宅	16年12月	本書掲載 ⑬-33
12	上代石塚遺跡	04-1区	樽井	287.51	店舗	16年4月	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(確認調査・第15図) ⑮-32
13	座頭池遺跡	04-1区	岡田	1252.46	その他物 建	16年7月	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。(確認調査・第16図) ⑬-12
14	岡田西遺跡	04-1区	中小路	2824.64	店舗	16年10月	本書掲載(確認調査) ⑬-26
15	中小路西遺跡	04-1区	信達市場	265.80	個人住宅	16年7月	本書掲載 ⑬-24
16	北野遺跡	04-1区	信達大苗代	10250.41	宅地造成	16年7月	別書掲載(第19図) ⑬-11
17	新伝寺遺跡 北野遺跡	04-1区	北野	1870.86	店舗	16年4月	本書掲載(確認調査) ⑮-14
18	一岡神社遺跡	04-1区	北野	1151.77	事務所	16年10月	同上 ⑬-37
19	海会寺跡	04-1区	信達大苗代	2220.16	共同住宅	16年9月	同上 ⑮-33

第3表 試掘調査一覧表

平成16年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	面積(m ²)	用途	調査年月	備考
1	範 圃 外	男里	1,223.25	工 場	16年1月13日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
2	範 圃 外	新家	1,645.51	宅 地 造 成	16年1月30日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
3	範 圃 外	樽井	1,033.11	宅 地 造 成	16年2月10日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
4	範 圃 外	男里	509.53	長 屋 住 宅	16年3月11日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
5	範 圃 外	信達牧野	7,174.50	宅 地 造 成	16年3月12日	トレンチ4カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
6	範 圃 外	信達牧野	1,150.65	分 譲 住 宅	16年3月29日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
7	範 圃 外	信達牧野	931.16	宗 教 施 設	16年4月28日	トレンチ2カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
8	範 圃 外	樽井	489.94	鉄骨造平屋建	16年5月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
9	範 圃 外	岡田	481.57	分 譲 住 宅	16年6月3日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
10	範 圃 外	信達市場	495.90	分 譲 住 宅	16年6月4日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
11	範 圃 外	新家	489.30	店 舗	16年6月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
12	範 圃 外	男里	498.10	工 場	16年6月22日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
13	範 圃 外	岡田	985.12	共 同 住 宅	16年6月28日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
14	範 圃 外	岡田	23,525.21	宅 地 造 成	16年7月13日	トレンチ3カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
15	範 圃 外	新家	496.19	宅 地 造 成	16年7月14日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
16	範 圃 外	信達市場	1,791.32	倉 庫	16年8月9日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
17	範 圃 外	男里	3,857.13	店 舗	16年8月16日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
18	範 圃 外	信達市場	658.68	宅 地 造 成	16年8月25日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
19	範 圃 外	信達市場	2,263.58	宅 地 造 成	16年10月1日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
20	範 圃 外	信達牧野	8,805.38	宅 地 造 成	16年12月2日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
21	範 圃 外	新家	2,085.76	保 育 所 建 替	16年12月6日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。
22	範 圃 外	信達市場	1,738.62	共 同 住 宅	16年12月24日	トレンチ1カ所設定したが、遺構・遺物は確認されなかった。

第4表 立会調査一覧表

平成16年12月31日現在

No.	遺跡名	位置	面積(m ²)	用途	調査年月	備考
1	男里遺跡	男里	134.06	分 譲 住 宅	16年1月13日	遺構・遺物は確認されなかった。
2	天神ノ森遺跡	男里	235.50	ガ ス	16年2月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
3	本田地遺跡	樽井	9.00	ガ ス	16年2月2日	遺構・遺物は確認されなかった。
4	岡田西遺跡	中小路	58.00	広 告 塔 設 置	16年3月25日	遺構・遺物は確認されなかった。
5	座頭池遺跡	樽井	343.83	個 人 住 宅	16年4月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
6	坊主池遺跡	信達市場	107.92	個 人 住 宅	16年4月28日	遺構・遺物は確認されなかった。
7	坊主池遺跡	信達市場	100.00	個 人 住 宅	16年4月28日	遺構・遺物は確認されなかった。
8	坊主池遺跡	信達市場	107.56	個 人 住 宅	16年4月28日	遺構・遺物は確認されなかった。
9	坊主池遺跡	信達市場	114.06	個 人 住 宅	16年4月30日	遺構・遺物は確認されなかった。
10	坊主池遺跡	信達市場	117.16	個 人 住 宅	16年4月30日	遺構・遺物は確認されなかった。
11	坊主池遺跡	信達市場	131.04	個 人 住 宅	16年4月30日	遺構・遺物は確認されなかった。
12	男里遺跡	男里	151.61	分 譲 住 宅	16年5月26日	遺構・遺物は確認されなかった。
13	座頭池遺跡	樽井	417.14	個 人 住 宅	16年6月24日	遺構・遺物は確認されなかった。
14	男里遺跡	男里	132.93	分 譲 住 宅	16年6月28日	遺構・遺物は確認されなかった。
15	男里遺跡	男里	142.22	分 譲 住 宅	16年6月28日	遺構・遺物は確認されなかった。
16	男里遺跡	男里	139.78	分 譲 住 宅	16年7月20日	遺構・遺物は確認されなかった。
17	幡代遺跡	幡代	1,300.00	その他建物 (広 告 塔)	16年8月11日	遺構・遺物は確認されなかった。
18	幡代遺跡	幡代	924.32	店 舗	16年8月11日	遺構・遺物は確認されなかった。
19	木田地遺跡	樽井	112.38	個 人 住 宅	16年8月26日	遺構・遺物は確認されなかった。
20	男里遺跡	男里	137.99	分 譲 住 宅	16年8月31日	遺構・遺物は確認されなかった。
21	座頭池遺跡	樽井	434.64	分 譲 住 宅	16年9月22日	遺構・遺物は確認されなかった。
23	男里遺跡	男里	145.45	分 譲 住 宅	16年10月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
24	木田地遺跡	樽井	112.48	分 譲 住 宅	16年10月14日	遺構・遺物は確認されなかった。
25	岡田西遺跡	中小路	6.75	その他建物 (広 告 塔)	16年12月15日	遺構・遺物は確認されなかった。

第2章 男里遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2）

男里遺跡は市域北西端、阪南市との境界をなす男里川右岸の沖積地に立地する。遺跡の西端、男里川沿いに発達した自然堤防上に現男里集落があり、東端の沖積段丘上には現馬場集落がある。その間の氾濫原や谷底低地、旧河道は主に耕作地として利用されている。遺跡中央に位置する双子池は男里川旧河道の痕跡とされ、南北に並んだ双子上池、下池の間を信長街道^①が通っている。以下に今日までの調査成果を概観する。

旧石器時代のナイフ形石器が双子上池より採集され^②、遺跡南東部より縄文時代中期末から後期初頭の土器が出土しているが、いずれも遺構に伴わず詳細は明らかでない。縄文時代晩期には双子上池北方に長原式期のピット^④、現男里集落北縁部から東端部に滋賀里Ⅲ・Ⅳ式期の溝や谷^{⑤⑥}、遺跡北西部や双子上池に流路^⑦などが確認される。滋賀里Ⅲ・Ⅳ期の土器と共伴する遺物にはサヌカイト原礫やチップ、石棒などが含まれており、現男里集落北東部を中心とした集落が存在する可能性がある。

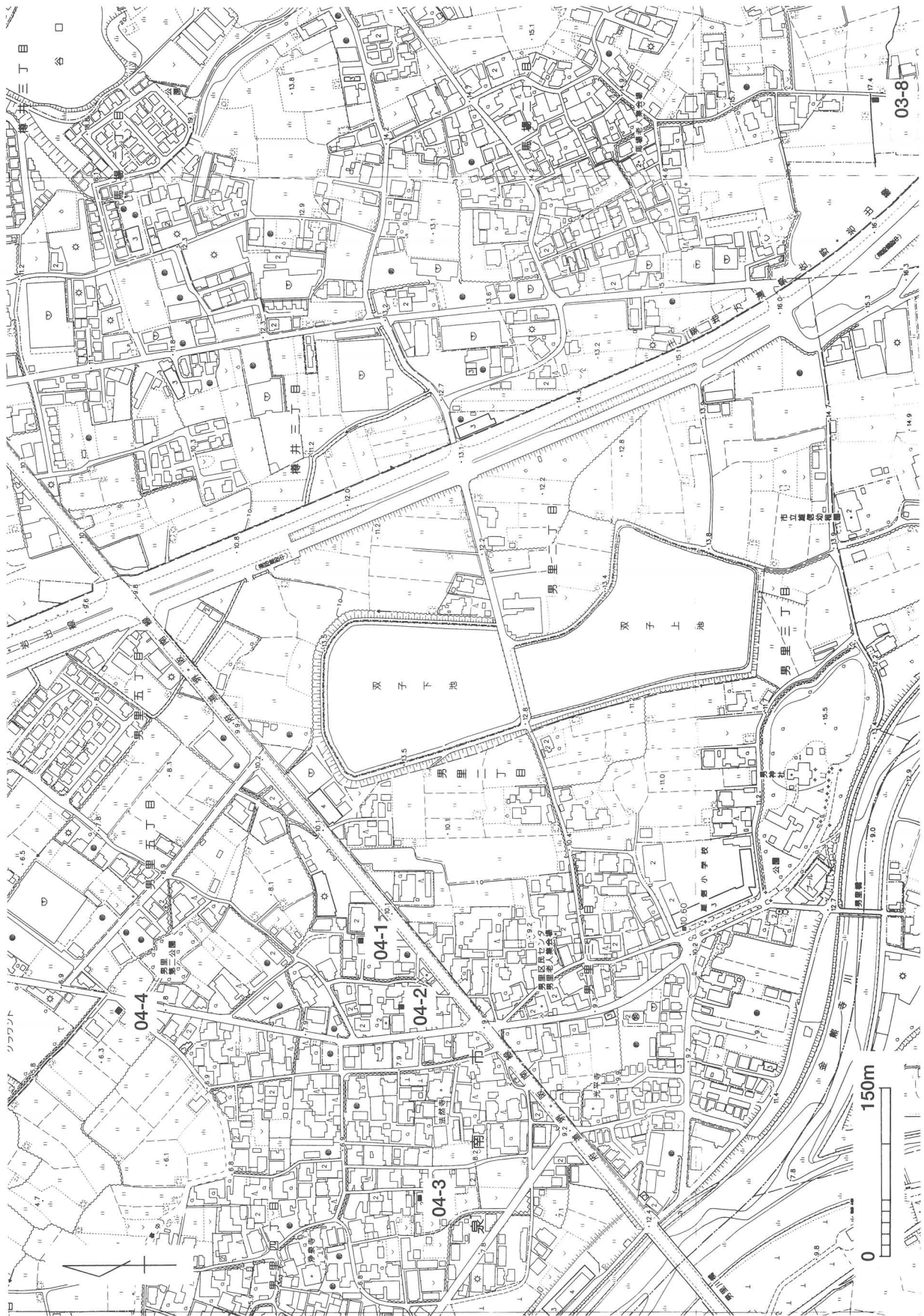
弥生時代前期には、双子上池堤体部において遺物包含層が確認され^⑧、中には縄文時代晩期の深鉢と弥生時代前期の壺とがほぼ同一の層位より出土しており、注目される。中期前葉には、先にみた縄文時代晩期の谷の埋土上層より遺物^⑨がみられることから、谷の南東側、現男里集落北東部に集落が求められる。中期中葉から後葉には遺跡の南東部を中心として、数十棟の竪穴住居や掘立柱建物、方形周溝墓、木棺墓、さらに集落を画する大溝^⑩が確認されている。弥生時代末期から古墳時代初頭には双子上池北東縁部や現男里集落中心部において方形竪穴住居^⑪、掘立柱建物^⑫、溝^⑬、流路^⑭などが確認されている。古墳時代後期には現男里集落北東縁部において竪穴住居^⑮が確認されている。

飛鳥時代から奈良時代には双子上池を間に挟む東西両地点より竪穴住居、掘立柱建物、廃棄土坑^⑯、現男里集落北東縁より掘立柱建物^⑰が確認される。双子上池北端部ではしがらみを伴う流路^⑱が確認された。現在のところ、遺跡内の灌漑遺構としては最古となる。

平安時代には、10世紀後半代に双子上池西側の集落^⑲や双子上池北東にも掘立柱建物^⑳や廃棄土坑^㉑よりなる集落が確認される。少し遅れて現男里集落北東縁部にも集落^㉒が出現する。

平安時代末から鎌倉時代には前代よりの集落域に加え、現馬場集落南端の複数地点にも集落^㉓が出現する。周辺では瓦類の出土が顕著で、小字より「安良寺」の存在が想定される。現男里集落南西部においても平安時代末以降の瓦類^㉔が出土し、現在の光平寺に連なるものと考えられる。鎌倉時代以降、現男里集落北東縁部に集落^㉕が存在するほか、明確な遺構は未確認ながら、中世の遺物包含層が現男里集落内及び馬場集落北方に多く確認される。これらは現在の集落域と概ね重なり、鎌倉時代以降に集落域の形成が始まったことを示す。先にみた瓦の分布と関連し、2つの集落が成立する過程を示す事象として注目される。

近世の遺構としては耕作痕がほとんどとなり、その分布は現在の耕作域と概ね重なる。また近年は、甘藷を濾過する際に用いる瓦漏^㉖が相次いで出土し、注目される。

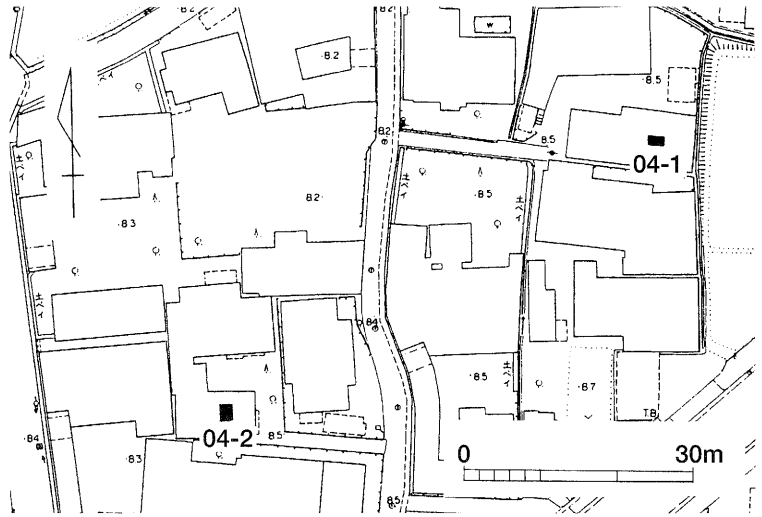


第1図 男里遺跡調査区位置図

第2節 04-1区の調査

1. 位置 (第1、2図)

調査区は、遺跡中央部やや西寄りに位置し、現男里集落のほぼ東端にあたる。地形分類上は自然堤防もしくは氾濫原上に立地する。周辺での調査例はあまり多くないが、調査区の西側約40mに93-7区、北側約70mには96-5区がある。これらの調査ではいずれも比較的安定した地山面が確認され、それぞれピットや土坑などが確認されている^⑧。トレンチは1カ所設定した。



第2図 男里遺跡04-1区・04-2区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 3、6)

幾分の耕作土を含んだ表土(1層・約20cm)を除去すると、暗橙色混じり暗灰褐色砂質土と灰褐色混じり橙色土よりなる床土(2・3層、約20~30cm)があるが、トレンチ西端部では下層の暗灰色砂質シルト(4層、約20~50cm)がすぐに現れることから、4層を部分的に削平して耕地化したものと考えられる。同層には近世から近代の陶磁器が含まれる。さらに暗オリーブ色砂質シルト(5層、約40~60cm)があり、6層の淡オリーブ色礫混粘土へと続く。5層は若干の円礫を含むが比較的安定しており、東から西へと緩やかに傾斜する。5、6層からは湧水が激しく、また5層には植物遺体が多く含まれるものの、両層ともに遺物はまったく出土しなかった。

以上の成果より、調査区が旧河道もしくは大きな池状遺構に含まれる可能性が考えられ、4、5層はその埋土、6層はそのベース層と捉えることができる。遺物が認められなかったために時期的には不明と言わざるを得ないが、4層に含まれる遺物の状況から、少なくとも近代頃まではぬかるみのような状態であったものと考えられる。

第3節 04-2区の調査

1. 位置 (第1、2図)

調査区は遺跡の中央、やや北西寄りに位置する。現男里集落のほぼ中央にあたる。地形分類上は自然堤防上もしくは氾濫原にあたる。周辺では西側約10mの89-8区で中世のピットや溝が確認されている^⑧。トレンチは1カ所設定した。

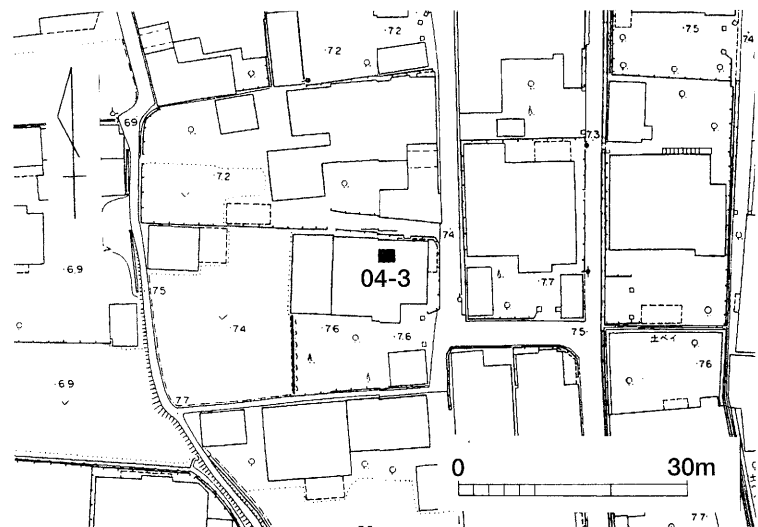
2. 層位と遺物の出土状況 (P.L. 3、6)

盛土（1層・約40cm）を除去すると、トレンチ北端部を除き淡灰褐色礫混土（2層・約20cm）が広がる。同層の下部は 細い帯状に還元しており、短期的に畑地として供されていたものと考えられる。2層直下にはにぶい暗黄褐色粘土の地山が確認されるが、地山はトレンチ北端にむかって急激に落ち込んでおり、下位には多くの礫を含む。地山の傾斜部分には淡暗灰褐色砂質土（3層・約50cm）が堆積しており、整地に伴う客土と考えられる。地山上面で精査を行ったが遺構は確認されなかった。いずれの層位からも遺物は出土しなかった。

第4節 04-3区調査

1. 位置（第1、3図）

調査区は府道堺阪南線「男里川」交差点の北北西約150m、現男里集落のほぼ中央に位置する。遺跡北西部に位置し、地形分類上は自然堤防もしくは氾濫原上に立地する。周辺での調査例は比較的多く、調査地南側に隣接して、88-2区、96-4区、97-1区などの調査が行われている。96-4区及び97-1区では庄内期の溝²⁹、また96-4区では庄内期の上層において中世のピットなどが確認されている。トレンチは1カ所設定した。



第3図 男里遺跡04-3区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 3、6）

表土及び盛土である淡黄灰色礫混砂質土（1層、約40cm）及び、切り合う暗黒灰色礫混土（2層、約40～60cm）を除去すると、淡灰色混じり暗黄褐色土（3層、約30～40cm）が確認される。市内において地山として確認される粘土層とよく似ているが、非常に均質で硬く締まっており、中に木片等をわずかに含むことから自然堆積によるものではなく、整地層である可能性が高いものである。上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。3層直下には褐色砂礫の地山が露呈する。地山上面の標高は6.70～6.80mを測り、わずかに凹凸を持ちつつ東から西側に向かって緩やかに傾斜している。いずれの層位からも遺物は出土しなかった。

第5節 04-4区の調査

1. 位置（第1、4図）

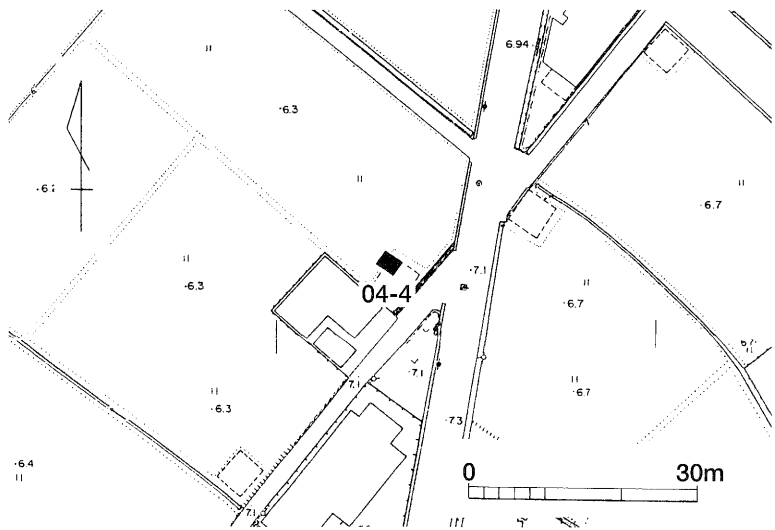
調査区は遺跡の北端、やや西寄りにあり、現男里集落からやや北にはずれた地点に位置する。

地形分類上は氾濫原及び谷底低地に分類される。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 3、6)

耕作土である灰黒色土(1層、約15cm)を除去すると、盛土若しくは旧耕作土と捉えられる2層、橙色混じり暗灰褐色砂質土(約20~40cm)、暗橙色混じり暗灰褐色砂質土(約30~40cm)があり、さらに3層、暗灰褐色混じり暗橙色砂質土(約20~40cm)へと続く、トレンチの北西部では3層の下位がより黄味の強い明橙色砂質土(約20cm)となる。3層直下には淡灰褐色砂礫が広がる。3層は下位でより細かな砂礫へと変化するものの、50cm以上掘削しても大きな変化は認められなかった。いずれの層位からも遺物は出土しなかった。

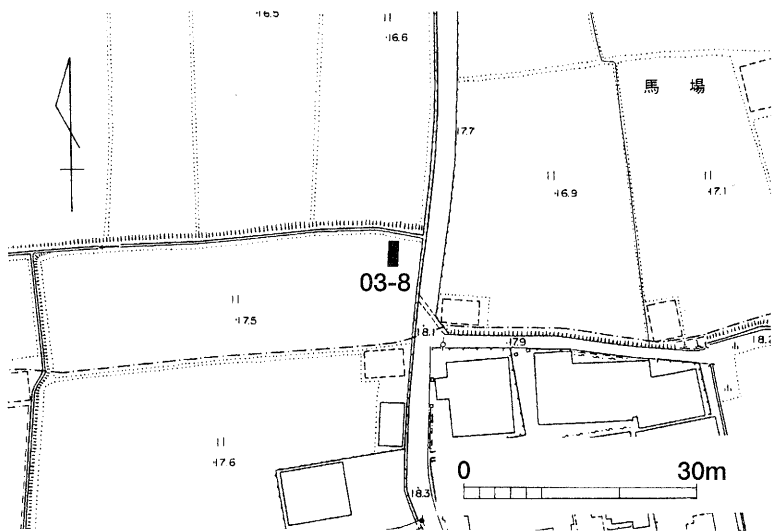


第4図 男里遺跡04-4区地形図

第6節 03-8区の調査

1. 位置 (第1、5図)

調査区は遺跡南東部、現馬場集落南西側に位置する。地形分類上は沖積段丘にあたり、周囲は耕作地として利用されている。周辺では北側約100mの90-10区で12世紀代の土坑などが確認されているほか、北西約50mの府道新設に伴う(財)大阪府埋蔵文化財協会による調査では弥生時代中期の集落³¹が確認されている。トレンチは1カ所設定した。



第5図 男里遺跡03-8区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

(P.L. 3、6)

盛土(1層・約30cm)を除去すると、茶褐色礫混シルト(2層・約40cm)、黒褐色シルト(3層・約10cm)、黒褐色礫混シルト(4層・約10cm)と続き、黄褐色礫混シルト(5層)の地山に

いたる。

1層は現代の盛土、2層以下は自然堆積と考えられる。3層より中近世の遺物が少量出土した。3・5層上面で精査を行ったが遺構は確認されなかった。

3. 遺物（P L. 12、第10図）

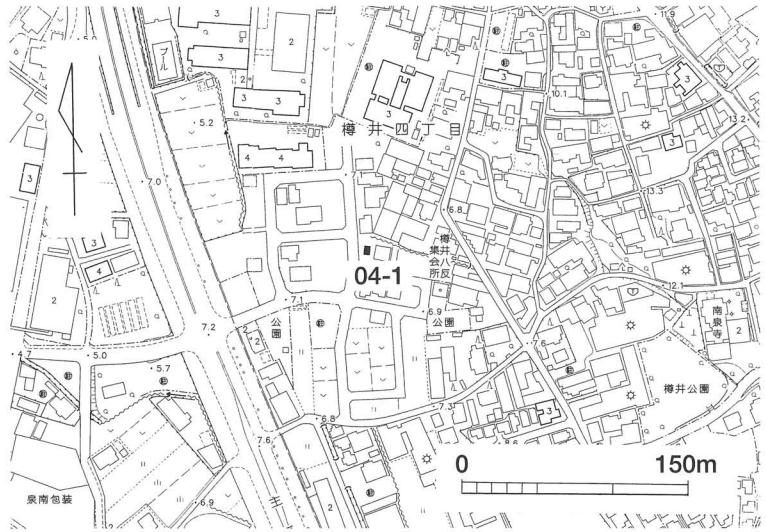
ON 1は3層より出土した椀である。底部以外を欠く。体部より直下する直線的な高台を有する。全体に浅黄色の施釉がなされるが、畳付は掻き取られ露胎をなす。黄白色を呈する胎土は粗で陶胎に近い。

- 註 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道－調査報告編－』（1987）
② 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅵ』（2002）
③ 財団法人大阪府文化財調査研究センター『男里遺跡発掘調査資料集』（2001）
④ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅢ』（1996）
⑤ 泉南市教育委員会「男里遺跡・Ⅱ」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
⑥ 泉南市教育委員会「E区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）
⑦ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅵ』（2002）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅷ』（2004）
⑧ ⑦と同じ。
⑨ ⑥と同じ。
⑩ ③と同じ。
⑪ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅷ』（2004）
⑫ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅴ』（2000）
⑬ 泉南市教育委員会「男里遺跡96-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅥ』（1997）
泉南市教育委員会「男里遺跡97-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅦ』（1998）
⑭ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅰ』（1997）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』（1997）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅵ』（2002）
大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅶ』（2003）
⑮ 泉南市教育委員会「B・D・E区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）
⑯ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
泉南市教育委員会「男里遺跡96-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅣ』（1997）
⑰ 泉南市教育委員会「D区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）
⑱ 大阪府教育委員会『男里遺跡発掘調査概要・Ⅱ』（1997）
⑲ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）
⑳ 泉南市教育委員会「男里遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅢ』（1996）
㉑ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会「1993年度の調査成果」『男里遺跡』（1994）
㉒ ⑰と同じ。
㉓ 泉南市教育委員会「男里遺跡99-4区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅦ』（2000）
財団法人大阪府文化財調査研究センター『男里遺跡発掘調査資料集』（2001）
㉔ 堀田啓一「考古編」『泉南市史 史料編』泉南市（1982）
泉南市教育委員会「光平寺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅡ』（1995）
㉕ 泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）
㉖ 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
泉南市教育委員会「幡代遺跡94-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅢ』（1996）
泉南市教育委員会「男里遺跡97-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅤ』（1998）
泉南市教育委員会「D区の調査」『男里遺跡発掘調査報告書』（2002）など。
㉗ 泉南市教育委員会「男里遺跡93-7区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅡ』（1995）
泉南市教育委員会「男里遺跡96-5区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅣ』（1997）
㉘ 泉南市教育委員会「男里遺跡89-8区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）
㉙ ⑬と同じ。
㉚ 1990年度、泉南市教育委員会による調査。
泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1991）に調査区位置のみ掲載。
㉛ ③と同じ。

第3章 戎畑遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L.1・2）

戎畑遺跡は市域北西、男里川右岸の沖積地に立地する。その大半を氾濫原及び谷底低地が占めるが、遺跡東端は沖積段丘に属する。現在、遺跡北端から東半部は小学校地や宅地として利用されており、西半部は南北に縦断する府道を挟んで工場地となっている。遺跡の中央部分は近年まで耕作地であったが、平成8年に区画整理が実施され、現在住宅地としての開発が進んでいる。



第6図 戎畑遺跡調査区位置図

区画整理に伴い^①95-1区が実施され、以降同区画内における発掘調査が継続的に行われている。95-1区では長さ100m以上、幅4m、深さ1mを測る大規模な溝が確認されており、平安時代の灌漑用水路と考えられる。この溝の支流と捉えられる溝が95-1区をはじめ、97-1区や97-8区、97-15区において確認^②されており、当該期の開発が広範囲に及ぶものであったことがわかる。これらの水路は13世紀代には埋没する。水路埋没後、比較的規模の大きい集落が営まれ、掘立柱建物、火葬施設、火葬墓、土坑墓、焼土坑などが確認されている。このうち焼土坑は95-1区や97-3区、府道敷における試掘調査^④などでも確認されており、ほとんどが直径数mの円形もしくは楕円形のプランを持つ土坑であり、底部が被熱するものや埋土に炭を含むものが多い。これらは出土遺物より真蛸壺の焼成土坑であると考えられるが、他に95-1区では長方形のプランを持つ土坑の長軸に合せて2本の焼成台を設け、ロストルを有する瓦窯と近い構造を有するものも確認されている。

第2節 04-1区の調査

1. 位置（第6、7図）

調査区は遺跡の中央、東寄りに位置し、地形分類上は沖積段丘面に立地している。95-1区の調査が行われた区画整理地に含まれる。周辺では95-1区のほか、東に隣接する97-15区や、北側約30mに97-3区などがある。95-1区のうち、本調査区の周囲では複数の掘立柱建物や、平行して伸びる3条の溝などが確認されており、比較的遺構密度の高い地区である。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況

(P L. 3、7)

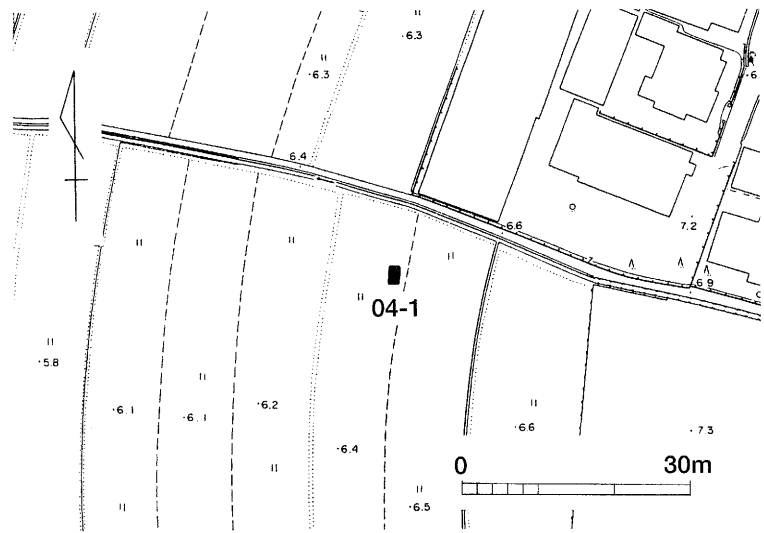
調査区全体に宅地造成に伴う盛土(約1.0m)が施されており、地盤改良のため非常に硬くしまっている。盛土以下には、現代の床土である暗橙色混じり淡灰褐色砂質土(2層、約10cm)、暗灰褐色土及び暗褐色混じり暗灰褐色土(3、4層、約20cm)、淡暗灰褐色土(5層、約30cm)、暗褐色粘質土(6層、約10~20cm)の各層がいずれも水平堆積をみせ、この

うち3、5層については旧耕作土と考えられる。また3層から6層より土師器細片がわずかに出土した。さらにトレンチ北端部では6層直下に地山である暗黄褐色粘土が露呈するが、残る大半部では淡暗褐色混じり淡暗黄褐色土が間に存在する。同層では、部分的に淡暗褐色土がブロック状に混入することから、6層の形成過程で地山との攪拌が生じた結果、形成されたものとも考えられる。

これらのうち、6層上面及び地山面において精査を行い、地山面において遺構を確認した。

3. 遺構(P L. 3、7)

遺構はトレンチの北東隅部で確認した。大半がトレンチ外へと拡がるため全容は不明であるが、緩やかに湾曲する辺を有することから、円形に近い形状を呈するピットであると考えられる。検出長30cm、検出幅6cm、検出面よりの深さ10cmを測る。埋土は1層であり、暗褐色粘質土である。遺物は出土しなかった。



第7図 戎畑遺跡04-1区地形図

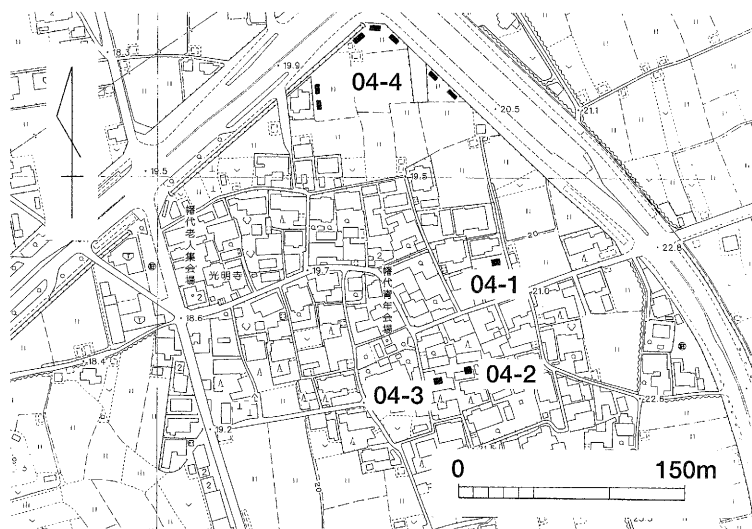
- 註 ① 泉南市教育委員会『戎畑遺跡現地説明会資料』(1996)
城野博文「泉南市戎畑遺跡の調査」『第35回大阪府下埋蔵文化財研究会資料集』
(財)大阪府文化財調査研究センター(1997)
- ② 泉南市教育委員会「戎畑遺跡97-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
泉南市教育委員会「戎畑遺跡97-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
泉南市教育委員会「戎畑遺跡97-15区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
- ③ 泉南市教育委員会「戎畑遺跡97-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XV』(1998)
- ④ 財団法人大阪府埋蔵文化財協会「試掘調査の成果」『男里遺跡』(1994)

第4章 幡代遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L.1・2）

幡代遺跡は市域平野部の南西端、男里川支流である金熊寺川右岸に位置する。遺跡中央には近年開通した府道が南北に縦断しており、府道から西は現在の幡代集落があり、府道東側は主に耕作地として利用されている。

既往の調査によって、旧地形はかなり複雑な様相を呈することが明らかになりつつある。遺跡中央を金熊寺川旧河道が蛇行しつつ北流し、旧河道左岸にあたる現集落内においても氾濫原を構成する河



第8図 幡代遺跡調査区位置図

川性堆積の砂礫層が顕著に確認される。これらに挟まれるように、集落の中央部や南東部に比較的安定した粘土層が分布し、微高地もしくは氾濫原上の窪みに自然堆積したものであると捉えることができる。

現在のところ、遺跡北東部を中心として弥生時代の遺物が散見されるが、詳細は不明である。当遺跡に南接する幡代南遺跡では旧河道埋土より縄文時代晩期から弥生時代中期前葉の遺物^②が出土しており、上流または旧河道河岸周辺に当該期の集落が存在する可能性もある。

遺跡北東部において、平安時代後期の掘立柱建物、溝、土坑^③などが確認されている。遺跡南西部においては、平安時代後期から室町時代の瓦がみられることから、寺院の存在を示唆するものである。ほかに現集落西端を限る市道敷の調査でも平安時代後期から室町時代に属するピット^⑤が確認されており、さらに西側に遺構が広がる可能性が考えられる。

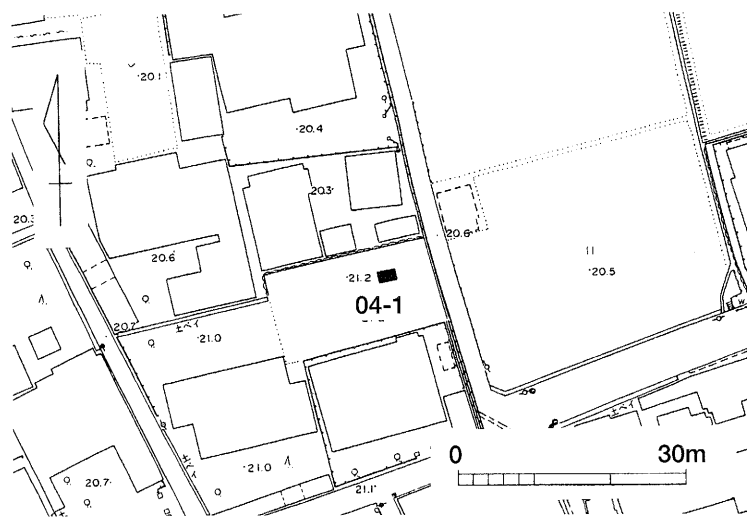
鎌倉時代から室町時代には現集落の東、府道敷の調査において掘立柱建物や井戸^⑥が確認されているほか、さらに東側の地点より13世紀代に属する掘立柱建物群や土坑^⑦などが確認されている。これらは平安時代後期より継続的に営まれた集落であると評価されるが、周辺では14世紀以降の遺構、遺物は確認されないことから、現集落域への移転が進んだものと考えられる。しかし現在のところ集落内においては当該期の遺構は未確認であり、わずかに遺物包含層が確認されているのみである。また幡代遺跡周辺には明瞭な条里型地割が残るが、幡代南遺跡の調査成果^⑧によれば、その成立は中世末から近世初頭に位置づけられる。

近世から近代の遺構、遺物が現集落内において多く確認されている。時期的には18世紀後半から19世紀前半に属し、家屋解体に伴う廃棄土坑^⑨が多い。多量の日常雑器や瓦が出土するが、中には製糖具^⑩や瓦を打ち欠いた土製円盤^⑪なども含まれている。

第2節 04-1区の調査

1. 位置 (第8、9図)

調査区は遺跡のほぼ中央、現幡代集落東端に位置し、地形分類上は沖積段丘に立地する。周辺では南西に約30mに91-2区、また南東約40mに93-1区が位置する。91-2区では、河川性堆積による砂礫の地山¹²が確認され、93-1区では巨大な落ち込みが確認され、埋土からは18世紀後半から19世紀前半に属する生活雑器¹³が多量に出土している。トレンチは1カ所設定した。



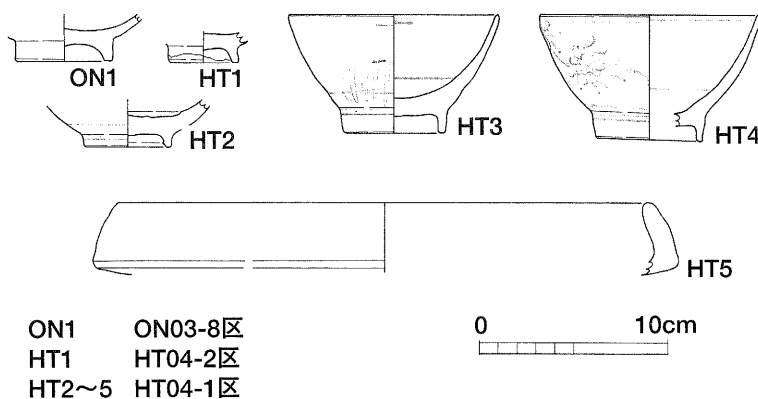
第9図 幡代遺跡04-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (P L. 3、8)

表土及び盛土(約80cm)を除去すると、耕作土である暗灰褐色砂質土(1層・約20cm)、床土である暗灰褐色混じり淡橙色土(2層・約10~20cm)が概ね水平堆積する。トレンチ西半では旧耕作土と捉えられる暗灰白色シルト(3層・約10cm)が続き、淡暗黄褐色粘土の地山へと至るが、トレンチ東半では床土直下に遺構(SE01)埋土である暗青灰色粘土が現れる。地山上面の状況は概ね平坦であるが、トレンチ西端では3層によって少し削られており、溝状の遺構になる可能性がある。地山面の標高は19.9mを測る。地山上面において遺構が確認された。

3. 遺構 (P L. 3、8)

遺構はトレンチ東端部において確認された。東端及び北端がトレンチ外へと拡がるため全容は不明であるが、南北長80cm、東西長90cmを測り、平面形状は東から北西に向かう緩やかな円弧をなす。円弧状の掘方ラインに沿ってベースである地山土が酸化作用により、明橙色混じり暗黄褐色粘土へと帯状に変質している。断面形状はほぼ直線的に伸び、全体では逆台形を呈するものと考えられる。深さは検出面より約80cmまでは掘削することができたが、地表面からの深さが2mを超えたため、以下の掘削を断念した。よって底



第10図 男里遺跡・幡代遺跡出土遺物

部の状況は不明である。埋土は暗青灰色粘土であり、下位にいくほど粘性が強くなり、埋没後も湧水状態にあったことがわかる。埋土から瓦や磁器などが出土した。これらの状況からSE01は灌漑用の井戸、いわゆる野井戸であると判断される。

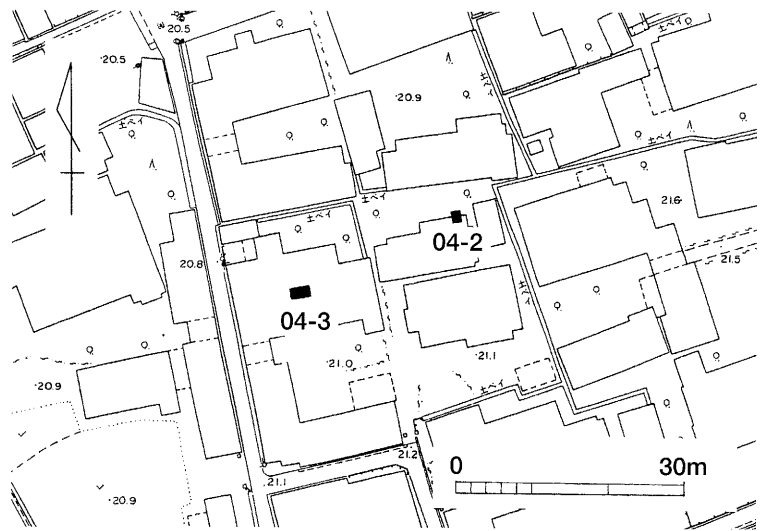
3. 遺物 (PL.12、第10図)

遺構 (SE01) 埋土より磁器、土師質炮烙などが出土した。HT2～HT4は染付椀である。いずれも乳白色の施釉がなされる。HT2は体部及び高台外面に圈線文が巡る。見込みは蛇の目釉ハギがなされ、高台は砂高台である。HT3は口縁部及び体部内外面、高台外面に圈線文、その他、見込みや体部外面にも文様が認められるが、欠損のため明らかでない。HT4は外面に草花文が認められる。HT5は土師質炮烙である。底部から直線的に内傾する口縁部を持つ。内面の強いナデによってやや内湾している。

第3節 04-2区の調査

1. 位置 (第8、11図)

調査区は遺跡南西部にあり、現幡代集落の中央やや東寄りに位置する。地形分類上は金熊寺川右岸に広がる沖積段丘に立地している。周辺は現集落内でも比較的多くの遺構、遺物が確認される地点で、調査区の南東約20mに位置する90-2区では中世の遺物包含層及びピット、落ち込み^⑭が確認されており、また北約15mに位置する95-1区では近世の廃棄土坑^⑮が確認されている。トレンチは1カ所設定した。



第11図 幡代遺跡04-2区・04-3区地形図

2. 層位と遺物の出土状況 (PL.3、8)

盛土 (1層、約40cm) を除去すると、灰色混じり暗褐色土及び、淡黄灰色砂質土 (2、3層、約20cm)、淡灰褐色土 (4層、約10cm)、黄白色砂質土 (5層、約15cm) がいずれもほぼ水平に堆積し、暗褐色混じり暗灰色礫混粘土 (6層) へと至る。このうち4層は旧耕作土と考えられ、4層についてはその床土とも捉えられるが、非常に軟弱である。6層は硬く締まり、かつ近世の瓦、陶磁器を含むことから、近世期の整地層とも捉えられるものである。6層上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。また6層以下の掘削を行っていないため、地山は未確認である。

3. 遺物（P L.12、第10図）

H T 1 は磁器碗である。5層より出土した。底部以外を欠くが、全体に灰オリーブ色の施釉がなされる。砂高台である。

第4節 04-3区の調査

1. 位置（第8、11図）

調査区は遺跡の南西部にあり、現幡代集落の中央やや東寄りに位置する。地形分類上は金熊寺川右岸に広がる沖積段丘に立地している。前節04-3区の西約20mに位置する。集落内の調査では、調査区の東から北西側に遺構、遺物が確認されることが多い。トレンチは1カ所設定した。

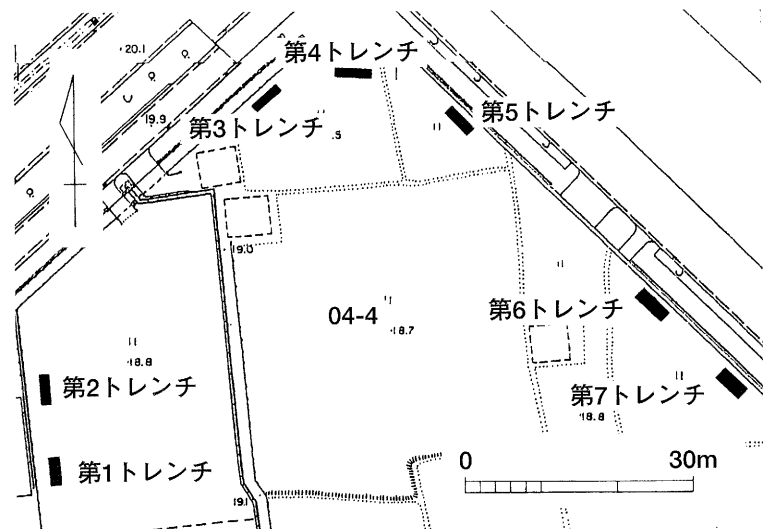
2. 層位と遺物の出土状況（P L. 3、8）

盛土（1層、約20cm）を除去すると、耕作土である暗灰褐色シルト（2層、約20cm）が現れ、3層、暗淡黄色土へと続く。この層ははじめ非常に硬く締まっているが、深度が増すにつれて軟弱になる。最終的に120cmもの厚さで施された盛土と判断された。非常に均質で遺物をまったく含まないため時期は不明である。以下に淡灰色粘土（4層、約10cm）を挟んで地山である暗灰褐色砂礫へと至る。何れの層位よりも遺物は出土しなかった。3層以下より湧水が激しく、当調査区はまさしく氾濫原に立地していることが明らかとなった。

第5節 04-4区の調査

1. 位置（第8、12図）

調査区は遺跡中央部北端にあたる。国道26号線「幡代北」交差点の南西側に隣接する。地形分類上では金熊寺川右岸の沖積段丘に立地する。周辺では調査区の東側に隣接する府道敷において(財)大阪府埋蔵文化財協会によって大規模な調査が行われ、弥生時代の落ち込みや中世の掘立柱建物^⑯などが確認されている。また本申請地には94-5区が含まれ、そこでは河川性の堆積による砂礫層の地山^⑰が確認されている。トレンチは擁壁部分に7カ所設定し、南西隅のトレンチより時計回りに第1～7トレンチと呼称する。



第12図 幡代遺跡04-4区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 3、9）

調査区全域にみられる耕作土（1層・約10～30cm）を除去すると、基本的には床土である橙色シルト（2層・約10cm）があり、さらに旧耕作土である暗灰褐色シルト（3層・約20cm）、暗褐色粘土（4層・約10cm）と続き、暗黄褐色粘土の地山へと至る。第1トレンチでは1層直下に4層が認められ、また第3トレンチでは3層直下に地山が拡がっており、場所によって旧耕作土等が削平されている箇所もある。地山とした暗黄褐色粘土は非常に軟弱でもろいものであったが、第3トレンチで一部深堀したところによると、約60cm程深度を下げて大きく状況が変わることがないため、地山と認定した。

遺物はほとんどなく、3、4層に細片がわずかに含まれている程度であり、詳細は不明である。5層上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。

- 註 ① 財団法人大阪文化財センター「幡代遺跡」『大阪府下埋蔵文化財（第30回）資料』（1994）
② 財団法人大阪文化財センター「幡代南遺跡」『大阪府下埋蔵文化財（第30回）資料』（1994）
③ 泉南市教育委員会「幡代遺跡」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
④ 泉南市教育委員会「幡代遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』（1988）
⑤ 1983年度、大阪府教育委員会による市道幡代鬼木線における府水道管理設に伴う調査。
⑥ ①と同じ。
⑦ 泉南市教育委員会「幡代遺跡03-3区の調査」『新伝寺遺跡91-1区・幡代遺跡03-3区発掘調査報告書』（2004）
⑧ ②と同じ。
⑨ 泉南市教育委員会「幡代遺跡94-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
泉南市教育委員会「幡代遺跡94-6区の調査」『幡代遺跡95-1区の調査』『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』（1996）
⑩ ③と同じ。
⑪ 泉南市教育委員会「幡代遺跡94-6区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』（1996）
⑫ 泉南市教育委員会「幡代遺跡91-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書IX』（1992）
⑬ ③と同じ。
⑭ 泉南市教育委員会「幡代遺跡90-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書VII』（1991）
⑮ 泉南市教育委員会「幡代遺跡95-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIII』（1996）
⑯ ①と同じ。
⑰ 泉南市教育委員会「幡代遺跡94-5区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）

第5章 岡中遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L.1・2）

岡中遺跡は市域平野部の南西端に位置する。遺跡範囲は現在の信達岡中集落とほぼ重なり、地形分類では遺跡の北西隅が旧河道となるほかは、金熊寺川右岸の沖積段丘に立地する。遺跡の西及び南端には金熊寺川が流れ、東端は愛宕山によって限られている。

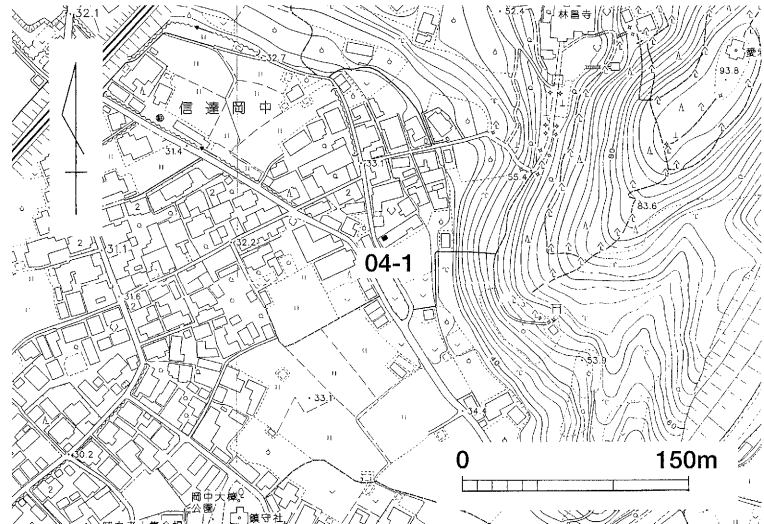
現在みられる集落は、遺跡の北端から西端を走る熊野街道^①に沿って展開しており、街道沿いには比較的古い町並みが残る。かえって遺跡南東部の多くは現在も耕作地として利用されている。集落中央に位置する鎮守社の境内には大阪府天然記念物に指定されている大楠とマキがある。

現在までに現集落内を中心として多くの調査が行われている。鎮守社の周囲において平安時代末期の瓦を伴う建物基壇や鍛冶炉遺構^②、14～15世紀の土坑墓群^③などが確認されているほか、中世以降に形成された複数の耕作面^④も確認されており、中世を中心として展開した集落及び生産地であると考えられる。

先の寺院跡は周辺に「長善寺」といった小字^⑤が残り、そこより出土した軒丸瓦は、隣接する林昌寺瓦窯において焼成されたことが明らかで、林昌寺跡をはじめ、岸和田市畑遺跡からも同範品^⑥が出土している。

今年度の調査区は次節にもあるとおり愛宕山の南西裾に位置するが、周辺は元來岡村と呼ばれ、鎮守社周辺とは、その成立を異にする可能性があるので、以下に少し触れておきたい。

現在の岡中という地名は明治17年に改名されたもので、以前は行政的に中村と呼ばれていた^⑦。元禄年間に記された『泉州志』^⑧には信達荘の一つとして「中村」がみえ、同時に「長岡王子」や「岡寺（林昌寺）」、「躑躅岡」の所在地として「岡村」が登場する。「長岡王子」の項で「岡村在中村内」とあることから、中村の一部が岡村と呼ばれていたものと考えられる。『林昌寺縁起』^⑨には、もと温泉山岡寺と称したものを11世紀末に勅命により現在の山号寺名に改めたことから、愛宕山及び西麓一帯が岡村と呼ばれていたことは確実である。現在知られる小字名では、愛宕山の西に「岡」、「岡ノ上」、「岡ノ原」、「岡ノ下」といった岡にまつわる小字が多く分布する。一方、現在の鎮守社周辺には「長」という地名が多く残り、「長」が転じて「中」になったものと考えられる。



第13図 岡中遺跡調査区位置図

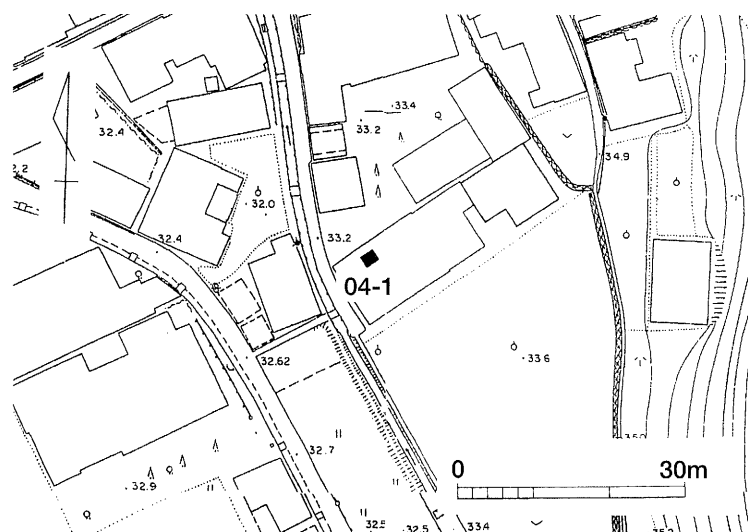
これらのことから、岡村は愛宕山南西麓に、また中村は鎮守社周辺を中心として発達したものであったが、2つの集落が発展するに伴い、集落間の空閑地が居住域もしくは生産域として開発されるに至って両集落の総称もしくは呼び名としての中村が用いられるようになった可能性がある。考古学的には両集落共に林昌寺（岡寺）、「長善寺」という寺院が存在したことが明らかであり、いずれも平安時代末期の創建が考えられるのであるが、ここでいう岡村での調査は今年度報告分を含めてもさほど多くはなく、他の集落構造等については比較できる段階にない。今後情報の蓄積を待つてより詳細な比較検討を行わねばならない。蛇足ながら「長岡王子」はまさしく「長」と「岡」の王子とも読め、熊野詣の盛んであった頃より、両集落は半共同体として運営されていたのかも知れない。

第2節 04-1区の調査

1. 位置（第13、14図）

調査区は遺跡の北東縁に位置する。現岡中集落の東端にあたり、遺跡の東端を限る愛宕山の南西裾にあたる。地形分類では金熊寺川右岸の沖積段丘に立地している。

周辺での既往調査では、北約15mに位置する95-2区において中世の耕作面^⑩が、また北東約90mの地点においても時期不明ながらピットや土坑^⑪などが確認されている。また調査区の北東約200mに位置する林昌寺跡の調査では平安時代末期の瓦窯^⑫、や石組階段を伴う中世の井戸^⑬などが確認されている。トレンチは1カ所設定した。



第14図 岡中遺跡04-1区地形図

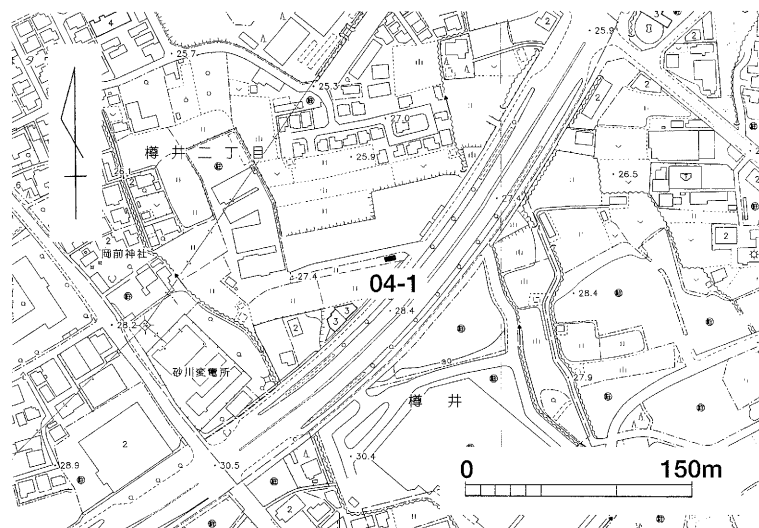
2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 3、9）

表土及び既存建物に伴う盛土（1層・約20cm）を除去すると、旧耕作土である淡灰褐色砂質土（2層・約20cm）及び床土である淡灰褐色混じり淡燈色土（3層・約10cm）が現われる。地元の方からの聞き取りによれば、調査区は戦前まで耕地として利用していたとのことであり、2、3層は当該期のものと考えて差支えないだろう。さらに旧耕作土と捉えられる灰白色砂質土（4層・約15cm）、床土である淡黄灰色土（5層・約20cm）、淡灰褐色混じり淡黄色砂質土（6層・約20cm）と続く。6層については旧耕作土もしくは耕地化に伴う客土と捉えられるものである。4～6層より瓦器や土師器の細片がわずかに出土した。6層以下に淡暗褐色粘土（7層・約15

cm)、さらに地山である淡黄褐色シルトが拡がる。7層は非常に硬く締まっており、中世と目される土師器細片が出土したが、詳細は不明である。これら確認された層序のうち7層上面及び地山上面において精査を行ったが遺構は確認されなかった。

以上、調査区においては中世以降、耕作地として利用されていたことが明らかとなったが、7層や地山面は安定したベースとなりうるもので、周辺の調査が進めば遺

構が確認される可能性が高いだろう。また7層については既往の調査例によると愛宕山裾から道光寺池に連なる開析谷に分布していることから、中世以前には谷状の湿地であったものと考えられる。



第15図 上代石塚遺跡調査区位置図

- 註 ① 大阪府教育委員会『熊野・紀州街道－調査報告編－』（1987）
 ② 1988年度、泉南市教育委員会による調査。
 ③ 泉南市教育委員会「岡中遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書V』（1988）
 ④ 90-1区、95-2区が愛宕山裾で、94-2区、97-1区が遺跡南端部でそれぞれ確認されている。
 ⑤ ③と同じ。
 ⑥ 93年4月、大阪市立博物館特別陳列「私たちの考古学 摂河泉の古瓦Ⅱ」における摂河泉古瓦研究会（現古代寺院研究会）による検討会
 ⑦ 「巻末年表」『泉南市史－通史編』泉南市（1987）
 ⑧ 「中世編」『泉南市史－史料編』泉南市（1982）
 ⑨ 仲村 研「古代・中世」『泉南市史－通史編』泉南市（1987）
 ⑩ 泉南市教育委員会「岡中遺跡95-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIV』（1997）
 ⑪ 1988年度、泉南市教育委員会による調査。
 ⑫ 泉南市教育委員会「林昌寺瓦窯」『泉南市文化財年報No.1』（1995）
 ⑬ 1988年度、泉南市教育委員会による調査。

第6章 中小路西遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L.1・2）

中小路西遺跡は市域北東部、現中小路集落西側に位置する。周辺は遺跡の分布密度が比較的高く、中小路北遺跡、中小路遺跡、坊主池遺跡、岡田西遺跡などが近接している。地形分類上は洪積段丘低位面に立地する。周辺は長らく耕作地として利用されていたが、近年は遺跡のほぼ中央を縦断する市道市場岡田線の西側、遺跡の北西部において宅地化が顕著である。

93年度以降、今回を含めて8件の調査が行われている。93-1区では灌漑用水路と、水路廃絶に際し、30点近い瓦器碗を意図的に埋めている状況が確認された。13世紀後半に廃棄されたものと思われる。93-1区の北西約50m、93-2区^②においてもほぼ同時期と考えられる灌漑用水路と多くの耕作痕が確認されている。これらは段丘開発の一端を知る貴重な手がかりとなるもので



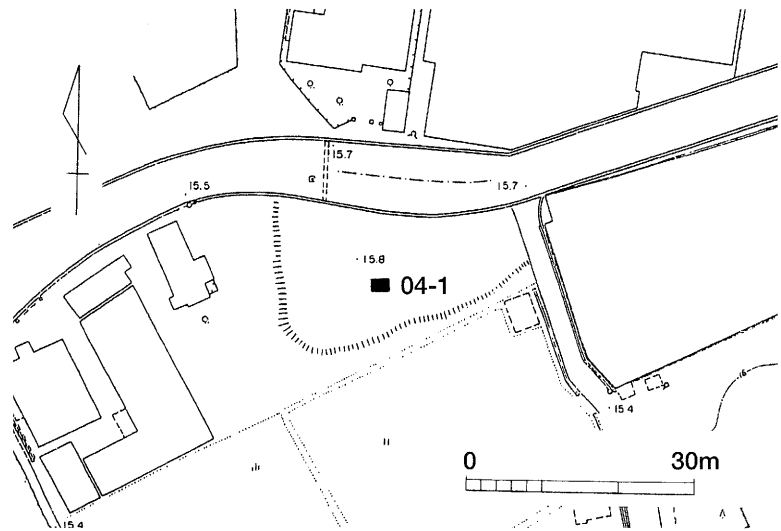
第16図 中小路西遺跡・岡田西遺跡・座頭池遺跡調査区位置図

あった。その後、周辺での調査が重ねられるが、その大半の地点で包含層である旧耕作土がすでに削平されており、盛土直下に地山が拡がるといった状況である。しかしながら当遺跡が周辺の開発史を語るうえで欠かせないものであることに、変わりはなく、今後とも慎重にデータを積み重ねていく必要がある。

第2節 04-1区の調査

1. 位置（第16、17図）

調査区は遺跡の西部に位置し、府道堺阪南線「中小路」交差点より南へ約250m下ったところにある。周辺は近年の宅地開発によって新しい住宅が多く立ち並ぶ。地形分類上は低位段丘上に立地している。周辺では先の宅地開発等によって比較的多くの調査が行われており、調査区より東へ約80mで93-1区があり、北西約60mに93-2区がある。



第17図 中小路西遺跡04-1区地形図

調査地の現況は更地であり、以前は鉄筋建物が建っていたとのことである。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 3、9）

約1mにおよぶ盛土を除去すると、トレンチの西半では同じく盛土である暗黄褐色土（約20cm）があるが、トレンチ東半は攪乱を受けている。攪乱の中に耕作土が認められることから、以前は耕作地であった可能性がある。これらの直下に暗黄褐色混じり淡灰白色粘土の地山が拡がる。地山面で精査を行ったが遺構は確認されなかった。しかし地山面は非常に安定した層であり、周辺に同層をベースとした遺構面が存在する可能性は十分に考えられる。ただし周辺の調査成果では、同様の地山面は確認されておらず、いずれも暗黄褐色系の粘土層が地山として確認されていることから、今回の調査区では、通有の地山面がすでに削平を受け、さらに下層の粘土層が地山として露呈しているものとも捉えることが出来る。

註 ① 泉南市教育委員会「中小路西遺跡93-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』（1994）
② 泉南市教育委員会「中小路西遺跡93-2区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）

第7章 岡田遺跡の調査

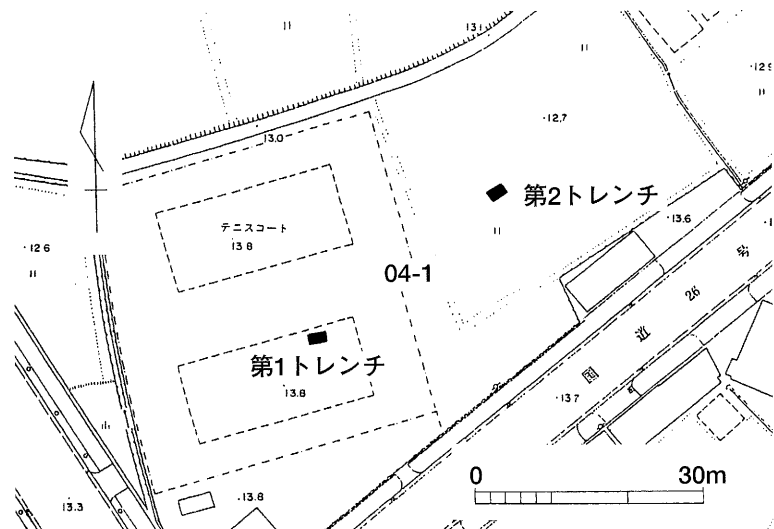
第1節 既往の調査（P.L.1・2）

岡田西遺跡は市域北東部、現中小路集落の北西に位置する。中小路西遺跡、岡田遺跡と接しており、榎井川左岸の低位段丘上に展開する遺跡群の一つである。遺跡の南東端を府道堺阪南線が、また北東には市道市場岡田線が通る。市道敷における調査^①では、12世紀初頭に段丘上に大規模な用水路が設けられ、周辺の耕地開発が開始され、14世紀末～15世紀初頭には一時的に井戸による灌漑体系に移行するものの、再び溝による灌漑形態を維持しつつ近現代に至っていることが明らかとなり、中世における耕地利用の変遷を伺うことのできる資料が得られている。

第2節 04-1区の調査

1. 位置（第16、18図）

調査区は遺跡の南東隅にあたり、府道堺阪南線「中小路」交差点北東側角地である。地形分類上は低位段丘に属する。先の市道敷における第1調査区に東接する。トレンチはそれぞれの建物予定地に1ヵ所ずつ設定し、西側のものを第1トレンチ、東側を第2トレンチと呼称する。



第18図 岡田西遺跡04-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況

（P.L.4、10）

両トレンチ共に、テニスコート場であったことから全面にアスファルト舗装が施されている。アスファルト及び盛土（1層、約1m）を除去すると現代の耕作土である灰黒色土（2層、約20cm）が露呈し、以下に淡黄色混じり淡灰白色土（3層、約15cm）、淡暗褐色土（4層、約10cm）がいずれもほぼ水平に堆積し、淡灰白色粘土の地山へと至る。地山上面は概ね平坦である。地山面の標高は12.7mを測り、市道敷の調査区と比べてわずかに高い。上面において精査を行ったが、遺構は確認されなかった。またいずれの層位からも遺物は出土しなかった。

第2トレンチでは、アスファルト舗装以下に厚さ1m以上の盛土が同様に施されており、計画建物の掘削が盛土以下には及ばないことを確認した。遺物は出土しなかった。

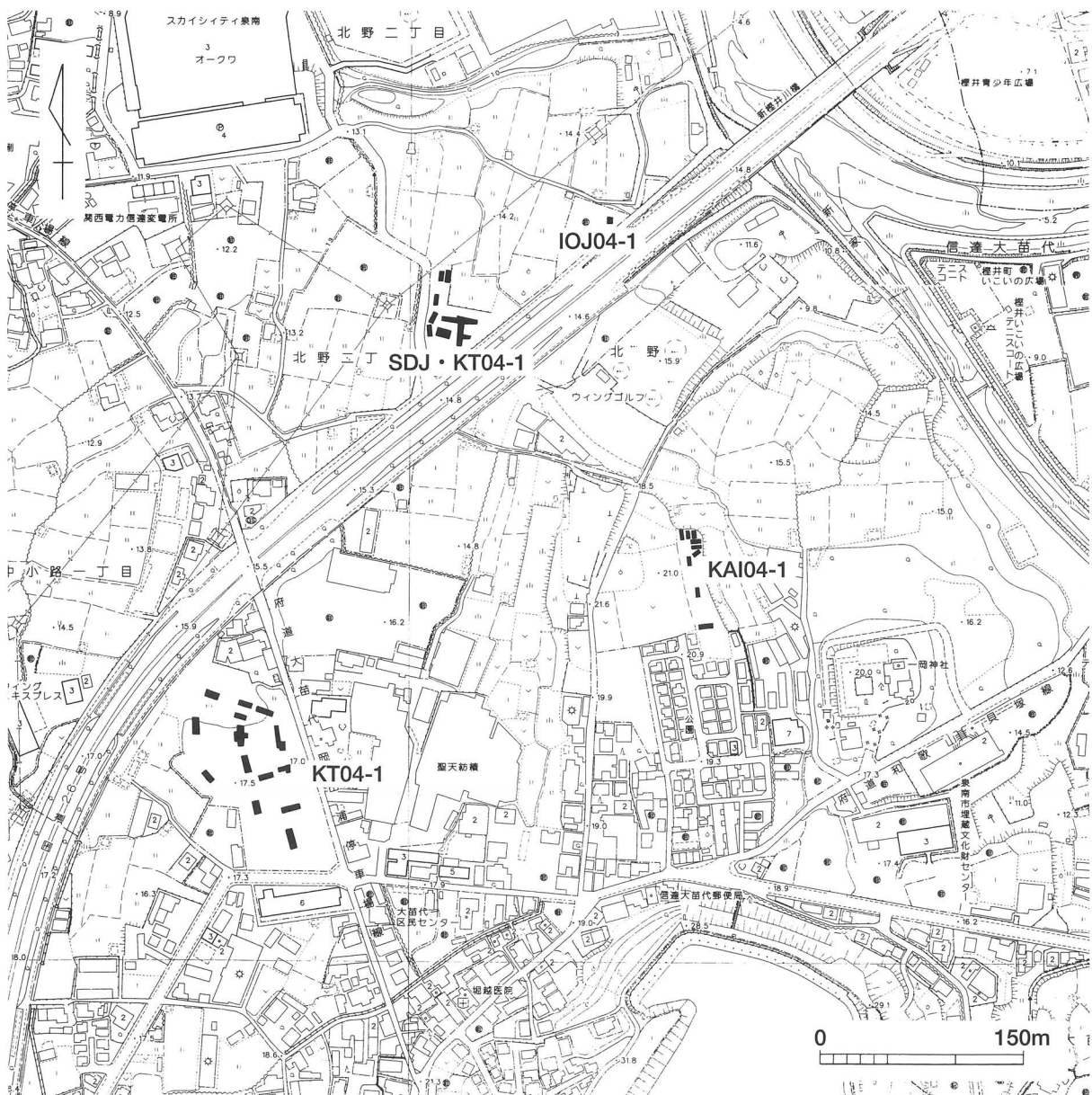
註 ① 泉南市教育委員会『岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書』（1995）

第8章 新伝寺遺跡・北野遺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L.1・2）

調査区は新伝寺遺跡、北野遺跡にまたがる。地形分類上はともに樫井川左岸の低位段丘上に立地する。新伝寺遺跡では遺跡の北半が店舗、ゴルフ練習場等となっており、南には耕作地が広がる。店舗建設に伴う調査^①では13世紀前半から後半の区画溝を伴う集落が確認され、5棟以上の掘立柱建物や真蛸壺焼成土坑などが確認されている。周辺では当該期の集落は他になく、開発時期は集落より少し遡るものの、段丘開発の主体であった可能性が考えられる。

北野遺跡は遺跡の西端から北東を国道26号が通り、さらに遺跡の西半を府道大苗代岡田浦停車場線が縦断する。このため道路沿いを中心として工場や宅地等の開発が進み、現在まで比較的コ



第19図 新伝寺遺跡・北野遺跡・一岡神社遺跡・海会寺跡調査区位置図

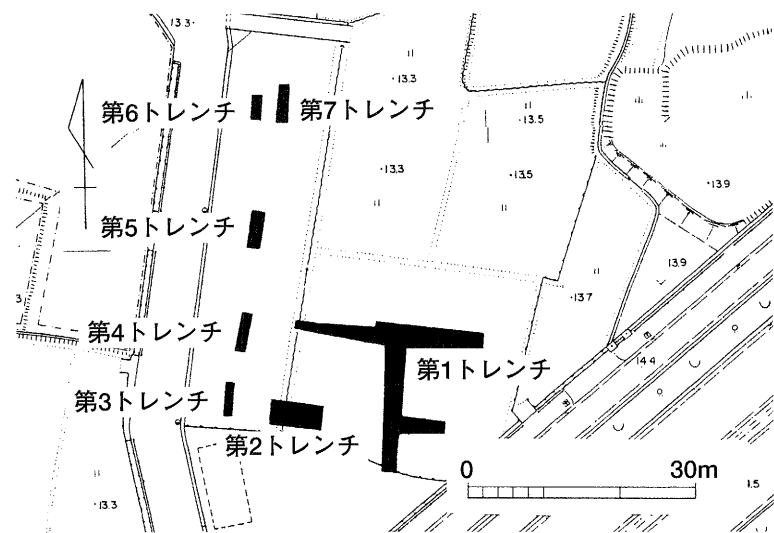
ンスタントに調査が実施されている。国道26号に北面する91-1区^②、99-3区^③では10世紀後半から11世紀の掘立柱建物が確認され、桁行7間を測る大規模なものも含まれる。91-1区の西約30mに位置する55-7区^④においても、時期的には不明瞭ながら平安時代頃の掘立柱建物が確認されていることから、当該期の集落が比較的広範囲に展開するものと考えられる。遺跡の南東端はかつて存在した稲荷山と呼ばれる丘陵によって限られるが、その丘陵裾を熊野街道（南海道）^⑤が通っており、遺跡東端より200m足らず、稲荷山を東に越えると白鳳寺院海会寺跡がある。

第2節 04-1区の調査

1. 位置（第19、20図）

調査区は国道26号線「大苗代西」交差点を大阪方面に約250m進んだ側道沿いにおいて、新伝寺遺跡と北野遺跡が隣接する地点にある。

地形分類上は低位段丘に属する。現況は耕作地及び更地であったが、調査区の南半にはかなりの盛土が施されていた。トレンチは7カ所を設定し、南東から北西へ第1～7トレンチと呼称する。



第20図 新伝寺・北野遺跡04-1区地形図

2. 層位と遺物の出土状況（P.L. 4、5、11）

層位的には各トレンチともに概ね共通している。調査区の全域に盛土（約30～120cm）があり、北から南に向かって厚みを増す。続いて耕作土である灰黒色土（1層・約20cm）、淡黄褐色シルト、淡黄灰褐色砂質土、灰色混じり暗橙色土などで構成される床土（2層・約20～30cm）がある。さらに旧耕作土である灰黄褐色砂質土、褐色混じり灰褐色砂質土（3層・約20～40cm）が全域に拡がり、暗黄褐色砂質粘土～シルトの地山へと至る。調査区南端の第1、2、4トレンチにおいては3層以下に旧耕作土と捉えられる褐色混じり灰褐色砂質土や暗褐色混じり灰褐色砂質土（4層・約10cm）が認められる。4層には暗褐色系の混入が顕著であることから、元来存在した包含層が耕作に伴い攪拌されて形成されたものと判断できる。また調査区北端にあたる第6トレンチや第7トレンチでは3層下に灰褐色混じり橙色砂質粘土（約10cm）があり、旧耕土に伴う床土であると考えられる。いずれのトレンチにおいても、確認された地山面の状況は概ね平坦であるが、調査区の南東から北西に向けて緩やかに傾斜しており、その標高は12.20～12.70mを測る。いずれの層位にも遺物はほとんどみられず、時期的には判然としないが、層位的にもっとも遡る4層を中世、もしくはそれ以降の形成と考えるのが妥当であろう。各トレンチ地山上面において精査を行い、第1、2、4、5トレンチで遺構が確認された。

3. 遺構（P L. 4、5、11）

第1トレンチでは、およそT字形に設定したトレンチの中央から北西方向にかけて掘立柱建物やピット、土坑などが検出された。

S B 01はトレンチの南北部分において確認された。確認された柱筋以外はトレンチ外へと拡がるため全体規模については不明であるが、梁間もしくは桁行が2間（約4.5m）で建物主軸はN 7° 50′ Eに向ける。ピットは径50～60cmの円形もしくは不整形を呈し、確認面からの深さは40～50cmを測る。断面形状については逆台形や三角形、U字形に近いものがあり、一定しない。いずれも径20cm程の柱痕が伴う。これらのうち最も規模の大きいPit09掘方では暗褐色混じり淡灰褐色土と灰褐色混じり暗黄褐色粘土がそれぞれ4～6層の互層をなし、いわゆる盤築状に埋め固めた様子が窺える。なおそれぞれのピット間の距離及び埋土の状況によって2間の建物としたが、北に位置するPit12についても方向的には問題なく、S B 01に付随する庇として考えることも可能である。Pit09（2、5、4、7、10）、10（6）及び12（1、11）より遺物が出土した。

S B 02はトレンチ北辺に沿って確認された。確認された柱筋以外はトレンチ外へと拡がるため全体規模については不明であるが、梁間もしくは桁行が3間（約7.8m）を測り、建物主軸はN 5° Eに向ける。ピットは径40～50cmの円形もしくは不整形を呈し、確認面からの深さは30cmを測る。断面形状は逆台形に近いものが多く、柱痕部分に柱のあたりが認められるものもある。東側2間分のピットにおいて径20cm程の柱痕が認められ、Pit38には遺構底部に根石状の砂岩が認められる。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

掘立柱建物としたピットを含めて、ピットは全部で49基確認された。径50cm程度を測る大型のものと、径20～30cmの小型のものがある。平面プランは大型のピットは円形または不整形を呈し、小型のものは円形を呈する。いずれも柱痕を伴うものが多い。特にS B 02周辺には大型ピットが集中しており、上記以外の掘立柱建物を構成する可能性がある。大形ピットのうち、Pit14（8、15）、16（12、13、16、17、19）、21（3）、24（20）、37（18）、39（9、21）より遺物が出土した。小型ピットからは遺物は出土しなかったが、規模や埋土の状況から中世以降に属するものと考えられる。

トレンチ南北部分（S K 02）及び東側拡張区において土坑（S K 01）が確認された。S K 01は北側がトレンチ外へと伸び全容は不明であるが、平面プランは長軸を北西－南東方向に向けるいびつな楕円形を呈し、検出長1.2m、最大幅40cm、確認面よりの深さ20cmを測る。埋土は暗灰褐色混じり暗褐色土である。埋土より遺物（14）が出土した。

S K 02は東半部がトレンチ外へと伸びるため全容は不明であるが、平面プランは長軸は北東－南西方向に向けた楕円形を呈し、検出長1.6m、最大幅50cm、検出面よりの深さ15cmを測る。埋土は淡暗褐色土である。埋土より若干の遺物が出土したが、細片のため図示できなかった。

第2トレンチでは不定形の落ち込み（S X 01）とピットが確認された。落ち込みはその西半に攪乱を受けているため、全体の規模・形状は判然としないが、現状では南北方向に伸びる方形に近い。検出長2.0m、幅1.6m、検出面よりの深さ8cmを測る。埋土は1層で暗褐色混じり灰褐色砂質土である。埋土から多くの遺物（22・24～41）が出土した。ピットは落ち込みの西側において3基確認された。径20～30cmの円形または不整形を呈し、確認面よりの深さは約10cmを

測る。埋土は1層であり、暗褐色混じり灰褐色シルトである。このうちトレンチ西端中央のPit 01より遺物(23)が出土した。

第4、5トレンチではピットが確認された。いずれも径30cmの円形または不整形円形を呈し、確認面よりの深さ約20cmを測る。埋土は1層であり、灰褐色砂質土である。遺物は出土しなかった。規模及び埋土の状況から中世以降のものと判断される。

4. 遺物 (P L. 12、第21図)

第1トレンチより出土した1~21のうち、S B 01のpit09掘方より2、5、柱痕より4、7、10、Pit10より6が出土している。その他、1、11はPit12掘方、8、15はPit14、12、13、16、17、19はPit16、3はPit21、20はPit24、18はPit37、9、21はPit39、14はS K 01より出土している。第2トレンチ出土の22~41のうち、Pit01より出土した23を除いて、S X 01より出土したものである。また1~3、6~12、22~25は土師器、13~21、26~41は須恵器である。

1は坏である。やや内湾しながら立上がる体部に、外反する口縁部を持つ。摩滅が激しく詳細は不明である。2は壺口縁部である。外反しつつ立上がり、口縁端部には緩やかな平坦面を有する。3は坏底部である。端部を失うが比較的しっかりとした高台を有する。4は土錘であり、下部を欠くが両端に穿孔を有する。5は鉄製品である。現状はかなり錆化しており、詳細は不明であるが、断面形状が方形に近く鉄釘の可能性はある。6は皿である。底部と体部の境界に強いナデを施すことによって、明瞭な屈曲点を持つ。7~12は甕である。口縁端部をつまみ上げるもの(7、9、11、12)と平坦面を有するもの(8)がある。10の頸部にはハケが施される。

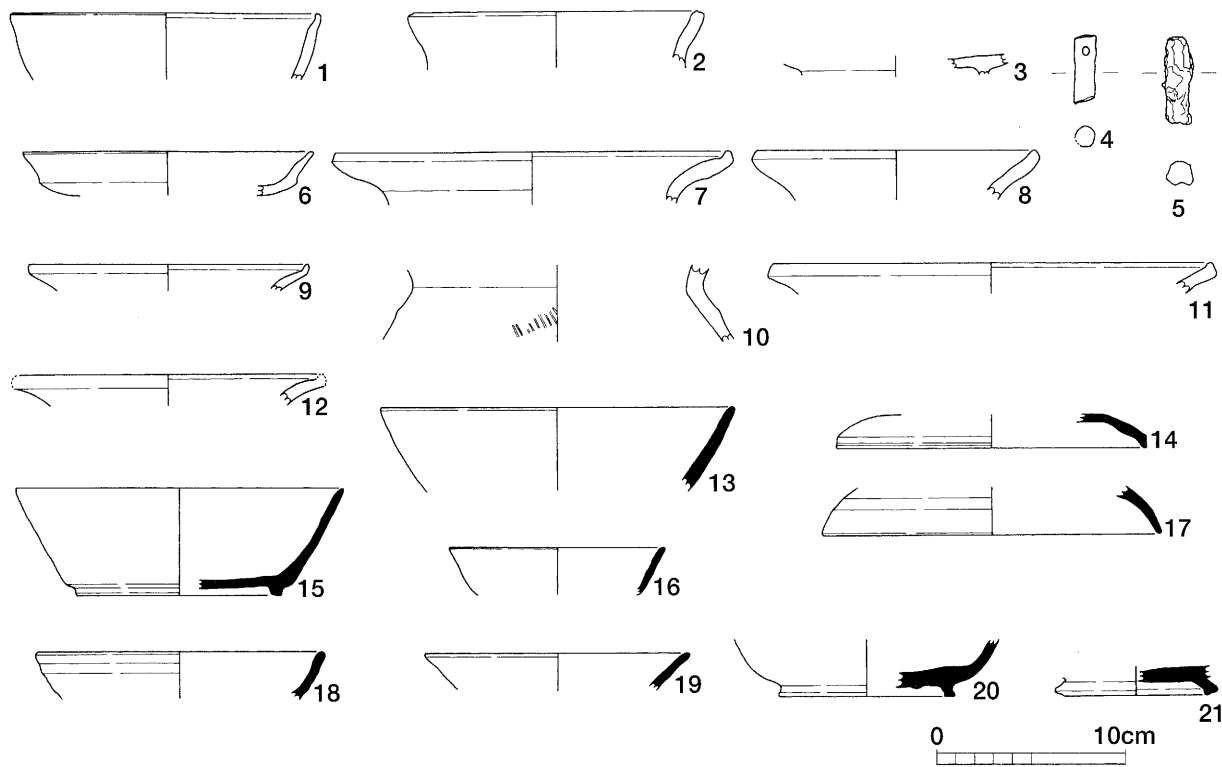
13、15~21は坏である。底部から内湾しつつ立上がるもの(13、18)、直線的に立上がるもの(15、16)、直線的に立上がり端部が外反するもの(19)がある。高台にはハ字状に大きく開くもの(21)がある。14、17は蓋である。

22、23、25は甕である。23、25は口縁端部に平坦面を有する。24は鉢である。内湾しつつ立上がり、口縁端部は平坦面を有する。

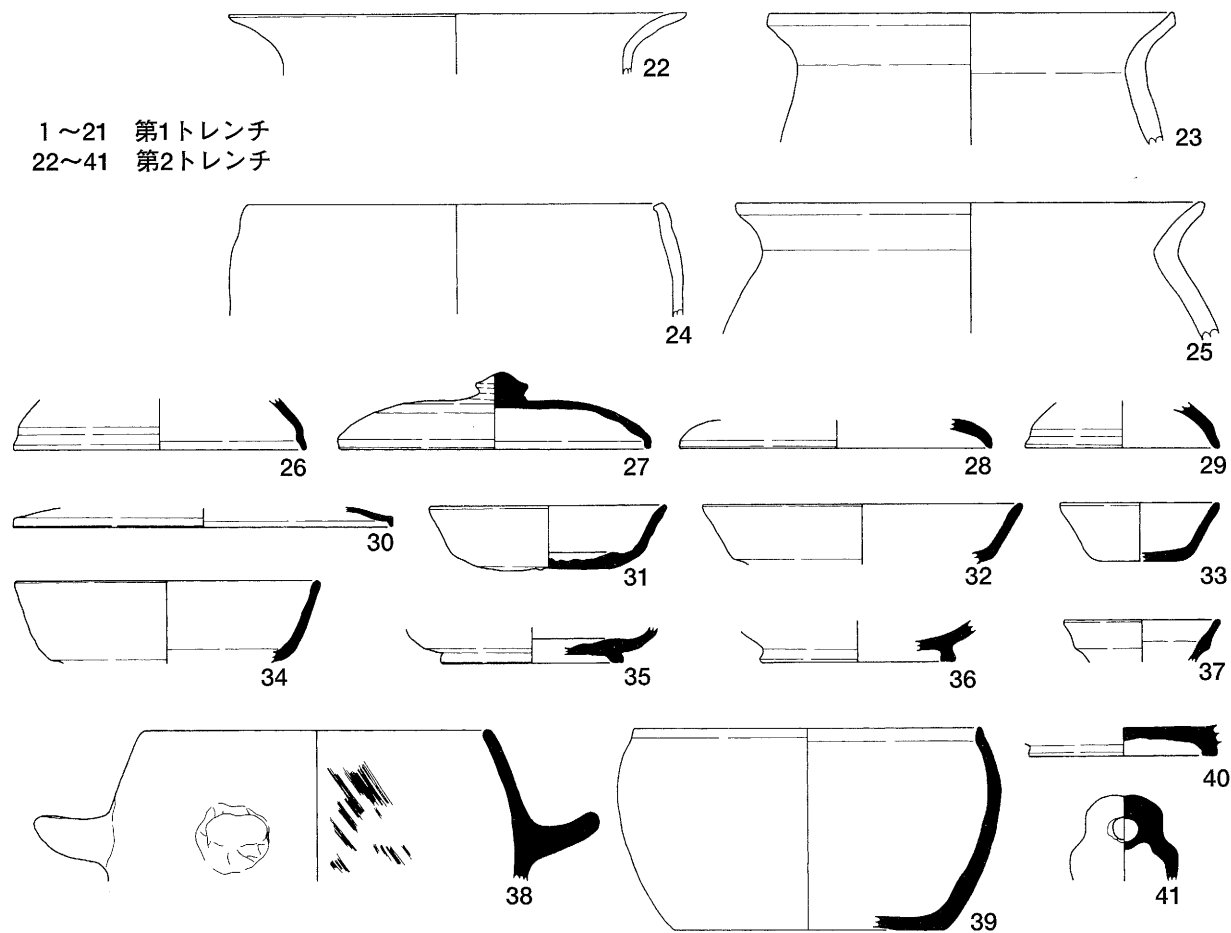
26~30は蓋である。端部が平坦面をなすもの(27、28、30)、ナデによって外反するもの(26、29)がある。31、33~36、40は坏である。体部立上りの形状には、底部より緩やかに外反しつつ直線的に立上がるもの(31、33)、内湾するもの(34)があり、底部の形状には平底を呈するもの(31、33)高台を有するもの(35、36、40)がある。35、36の高台はハ字状に開く。32は皿である。高台を欠くが、底部より緩やかに外反しつつ直線的に立上がる体部を持つ。37は坏または壺の口縁部である。38、39は鉢である。38は把手を有し、体部内面はハケが施される。41は釣鐘状の蛸壺である。

以上、今回の調査で出土した遺物は、一部7世紀代中頃のものと見受けられ、時期的には明確なまとまりを持たないが、概して8世紀中頃から後半に位置づけられる。

註 ① 泉南市教育委員会「新伝寺遺跡91-1区の調査」『新伝寺遺跡91-1区・幡代遺跡03-3区発掘調査報告書』(2004)
② 泉南市教育委員会「北野遺跡発掘調査報告書」(2003)
③ 泉南市教育委員会「北野遺跡99-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XIX』(2002)
④ 泉南市教育委員会「55-7地区」『男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(1981)



1~21 第1トレンチ
22~41 第2トレンチ

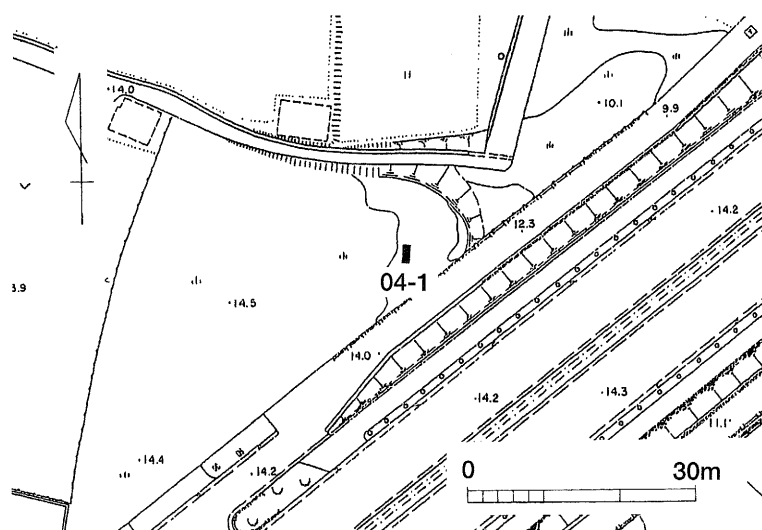


第21図 新伝寺・北野遺跡出土遺物

第9章 一岡神社遺跡の調査

第1節 既往の調査（P L. 1・2）

一岡神社遺跡は市域北東端に位置し、現信達大苗代集落の東に位置する一岡神社より北西に向かって展開する。榎井川左岸に沿って立地し、その南東部は海会寺跡と重なる。地形分類上は西半が低位段丘に、東半が氾濫原及び谷底低地に立地する。市域でも比較的早く、昭和50年代には既に周知されていたが、今日まで本格的な発掘調査は行われず、弥生土器、須恵器などの散布地とのみ認知されていたものである。しかしながら近



第22図 一岡神社遺跡04-1区地形図

隣には、先の海会寺跡をはじめとして、北野遺跡や新伝寺遺跡といった重要な遺跡が多く分布しており、本遺跡においてもデータの蓄積が待たれるところである。

第2節 04-1区の調査

1. 位置（第19、22図）

調査区は遺跡の北端に位置し、国道26号「大苗代西」交差点を大阪方面に約350m進んだ側道沿いにある。地形分類上は低位段丘に立地している。周辺では本調査区より西約100mの地点に、新伝寺・北野遺跡04-1区が位置する。トレンチは1カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P L. 4、10）

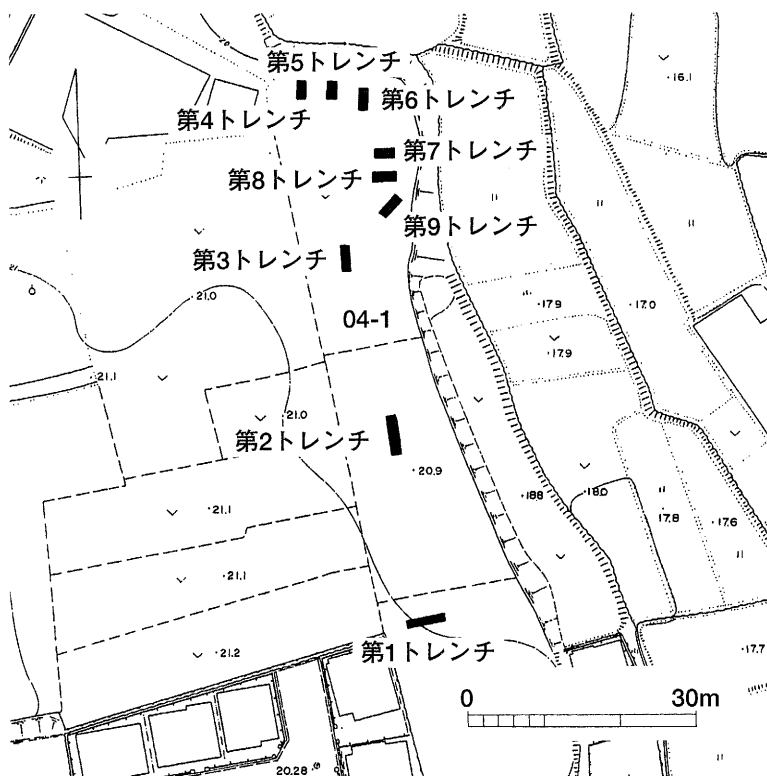
盛土（1層、約1.6m）を除去すると、淡灰褐色シルト（2層、約0.7m）がほぼ水平に堆積し、橙色混じり淡灰白色粘土の地山へと至る。2層は非常に均質なシルト層であることから、谷地形の埋土なのかも知れない。遺構、遺物は確認されなかったが、地山の状況より本調査区は安定した段丘面に立地しているものと考えられ、周辺に遺構が存在する可能性も十分に考えられる。

第10章 海会寺跡の調査

第1節 既往の調査（P.L.1・2）

海会寺跡は市域北東部、現信達大苗代集落の東に位置する。新家川左岸に位置し、地形分類上は大半が中位段丘となる。

7世紀第Ⅲ四半期創建となる寺院と、寺域東方においては7世紀初頭より9世紀前葉にかけて全11期に編年される集落^①が確認されている。なかでも8世紀初頭及び中葉の2時期には企画性の高い建物群が存在する。他に生産遺構として創建期の瓦窯や鍛冶炉、8世紀代の瓦窯群^②、7世紀代の粘土採掘坑^③などが確認されている。



第23図 海会寺跡04-1区地形図

第2節 04-1区の調査

1. 位置（第19、23図）

調査区は遺跡北西部、現在の大苗代集落の北東側に位置する。地形分類では洪積段丘低位面にあたり、周囲は耕作地として利用されている。周辺では東側約100mに海会寺の伽藍跡と一連の遺構^④が確認されているほか、本調査区南に隣接する住宅地の造成では瓦窯^⑤が確認されている。トレンチは9カ所設定した。

2. 層位と遺物の出土状況（P.L.4、10）

各トレンチとも層位はほぼ同じで、耕作土とその直下の盛土（1層）を除去すると、明灰褐色礫混シルトもしくは赤褐色細砂（2層）の地山にいたる。

1層はおそらく現代のものと考えられる。南隣に隣接する宅地と、本調査区は平坦面が連続しており一連の造成と考えられるからである。いずれのトレンチからも遺物は出土しなかった。2層上面で精査を行ったが遺構は確認されなかった。

註 ① 泉南市教育委員会『海会寺・海会寺遺跡発掘調査報告書』（1987）

② 泉南市教育委員会『海会寺跡発掘調査報告書』（2003）

③ 泉南市教育委員会『海会寺跡・I』『泉南市文化財年報No.1』（1995）

④ ①と同じ。

⑤ 1955年度、丘陵斜面より瓦窯が発見され、大阪府教育委員会による調査が行われている。

第11章 まとめ

本書では、平成16年1月1日より同年12月31日までの間に、文化財保護法に基づく発掘届出等にもとづいて行われた個人住宅等に伴う発掘調査及び確認調査、16件について報告している。以下にこれらの調査成果を概観し、今年度のまとめとしたい。

男里遺跡では5件の調査を報告した。

04-1区では、明確な遺構としては捉えることができなかったが、調査区が旧河道もしくは池の一部であると考えられることのできる結果が得られた。埋土に含まれる遺物によって、近代以降に耕地化されたことがわかる。

04-2区では安定した地山面が確認されたが、調査区の西約10mに位置し、中世の遺構が確認された89-8区^①とは異なり、遺構はまったく確認されなかった。両調査区の地山面の標高は西から東へと高度を増すことから、かつては起伏に富んだ地形であったことを知ることができた。

04-3区において確認された層序は、周辺においても同様に硬く締まった整地層とその直下に広がる砂礫層として確認され、広範囲にわたる整地業であった可能性がでてきた。ただし今回の調査では遺物の出土がみられず、時期的には不明であり、今後の課題として残される。

04-4区では、層高50cm以上に及ぶ砂礫層が確認された。軟弱であるため地山とは断定できなかったが、河川性堆積によるものである。北西に隣接する97-3区^②の調査においては、安定した地山面が確認されており、周辺の微地形が想像以上に複雑なものであったことが明らかとなった。

03-8区では、礫層で構成される自然堆積を確認した。河川の氾濫作用に起因するものと考えられる。出土遺物が少なく時期は不明であるが、調査区周辺は不安定な自然環境であったことが想定できる結果が得られた。

戎畑遺跡では1件の調査を報告している。調査では区画整理に伴い実施された95-1区^③に対応する遺構面が確認され、ごく部分的ながらもピットと目される遺構を確認することができ、95-1区の調査成果を補完する情報が得られた。

幡代遺跡では4件の調査を報告している。

04-1区では、灌漑用の井戸、いわゆる野井戸が確認された。当調査区の北西約150mに位置する99-1区^④においても、時期的には若干下るが、同様の野井戸が確認されており、周辺の灌漑形態を知るうえで、興味深い資料を得ることができた。

隣接する04-2区及び04-3区では、共に旧地形を知る結果が得られた。04-2区では硬く締まる近世期の整地層が確認され、04-3区においても、時期は不明ながら層高120cmにも及ぶ盛土と直下に広がる砂礫の地山が確認された。これらのことより、両調査区はともに地形的に氾濫原に属することが明らかとなったと言え、今回の調査成果は、課題となる詳細な旧地形復元のために不可欠なデータとなった。

04-4区は、現集落より北東に外れた地点において行われた。いずれのトレンチにおいても共通する層序が確認された。若干軟弱ではあるが、安定した粘土層が広範囲において確認された意義は大きい。調査区東側にも同様の堆積が存在し、かつ中世の遺構面^⑤であることから、調査区周辺において遺構が分布する可能性は高い。また今回の調査においては地山と認識したが、同様の

粘土層直下に弥生時代の遺構が確認されている地点^⑥もあり、同層の形成時期については、更に詳細な分析を行わなければならないだろう。

岡中遺跡では1件の調査を報告している。愛宕山の西裾に位置し、現岡中集落より北東にはずれた地点での調査であった。調査では中世以降、耕作地として供されていたことが明らかとなったほか、安定した地山面や地山直上に広がる硬く締まる粘土層が確認されたことで、周辺での遺構の発見が期待されるものである。

中小路西遺跡では1件の調査を報告している。段丘を構成する地山が確認された。しかし周辺の調査成果とは状況が異なり、通有の地山面が削平を受け、更に下層にある粘土層が露呈している可能性が指摘されることとなった。

岡田西遺跡では1件の調査を報告している。調査では西側に隣接する市道敷部分の調査と共通する地山面が確認された。市道敷の調査では、広範囲に広がる中世の耕作面が確認されており、調査区周辺においても同様の遺構が分布する可能性は高い。

新伝寺・北野遺跡では1件の調査を報告している。予想だにできなかった古代集落の一端が明らかとなった。第1トレンチにおいて確認されたS B01、02は、いずれも柱列のみの確認にとどまるため、建物規模や主軸については確定的ではないが、現状における主軸方位の差を消極的に理解すれば、両者共にほぼ同一方位を指向するものとして捉えることができ、S B01出土遺物により8世紀中頃から後半に位置づけられる。これらを調査区の南東約300mに位置する海会寺跡における建物群の分類^⑧と比較すると、7世紀初頭から9世紀前葉の11期に分類される海会寺跡建物群のうち、完全に合致するものは見当たらないけれども、8世紀代末葉とされる建物主軸方位に最も近い。さらに海会寺跡の調査成果^⑨を援用すると、8世紀後半から末には、寺院南側の斜面に瓦窯が築かれ、そこでは海会寺では出土しない平城宮式軒平瓦などを焼成していたことが明らかとなっている。こうした活動と今回確認された掘立柱建物群の間に、何らかの繋がり見出すことが、今後の大きな課題となるであろう。

一岡神社遺跡では1件の調査を報告している。段丘を構成する地山が確認され、周辺に遺構の拡がり期待されるとともに、地山直上に確認される均質なシルト層の存在は調査区が段丘上の浅谷に立地していることを示唆するものであった。

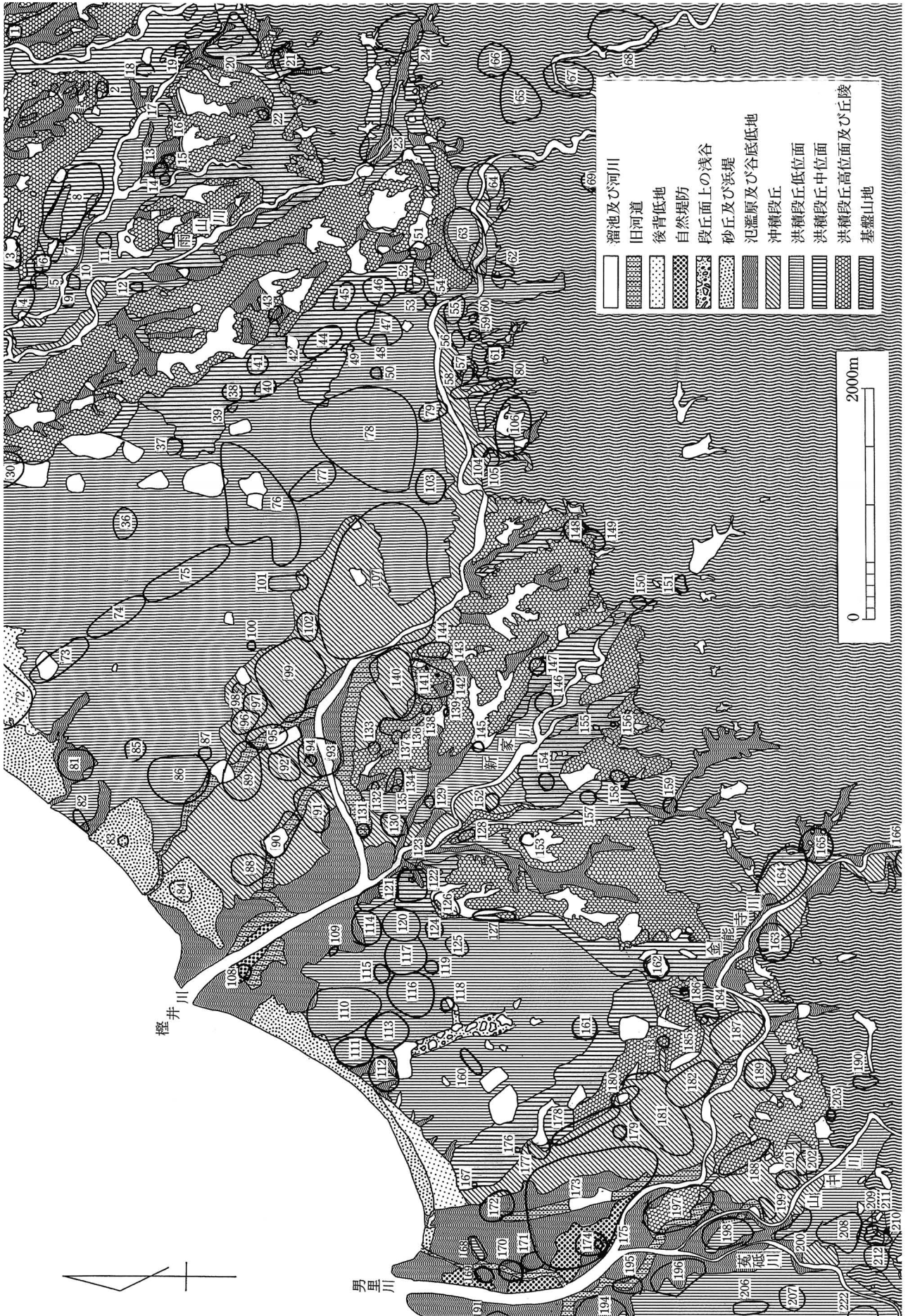
海会寺跡では1件の調査を報告している。調査区はかつて寺域西隣に存在した稲荷山と呼ばれる丘陵の北東斜面に位置する。稲荷山は昭和30年代の宅地開発に際して、瓦窯が発見された丘陵でもあり、特に斜面部の調査に注目された。結果、調査区のうち上面の平坦面、斜面共にすでに削平されていることが明らかとなり、先の開発範囲の一端を追認する結果を得た。

- 註 ① 泉南市教育委員会「男里遺跡89-8区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅶ』（1990）
② 泉南市教育委員会「男里遺跡97-3区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅤ』（1998）
③ 1995～96年度、泉南市教育委員会による発掘調査
④ 泉南市教育委員会「幡代遺跡99-1区の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書ⅩⅧ』（2001）
⑤ 泉南市教育委員会「新伝寺遺跡91-1区・幡代遺跡03-3区発掘調査報告書」（2004）
⑥ 1993年度、財団法人大阪府埋蔵文化財協会による発掘調査
⑦ 泉南市教育委員会「岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書」（1995）
⑧ 泉南市教育委員会「海会寺・海会寺遺跡発掘調査報告書」（1987）
⑨ 泉南市教育委員会「海会寺跡発掘調査報告書」（2003）

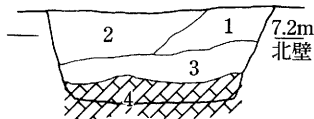
第5表 文化財一覧表

1	正法寺跡	47	野々宮遺跡	93	樫井城跡	139	引谷池窯跡	185	林昌寺瓦窯跡
2	小垣内遺跡	48	総福寺天満宮本殿	94	奥家住宅	140	兎田遺跡	186	林昌寺銅鐸出土地
3	大谷池遺跡	49	宮ノ前遺跡	95	道ノ池遺跡	141	フキアゲ山東遺跡	187	岡中遺跡
4	大久保B遺跡	50	垣外遺跡	96	岡ノ崎遺跡	142	フキアゲ山1号墳	188	高田山古墳群
5	下高田遺跡	51	屯田遺跡	97	中菖蒲遺跡	143	フキアゲ山2号墳	189	岡中西遺跡
6	紺屋遺跡	52	八王子遺跡	98	岸ノ下遺跡	144	兎田古墳群	190	雨山南遺跡
7	口無池遺跡	53	慈眼院金堂・多宝塔	99	諸目遺跡	145	池尻遺跡	191	福島遺跡
8	東門寺跡	54	日根神社遺跡	100	城ノ塚古墳	146	中の川遺跡	192	尾崎海岸遺跡
9	降井家屋敷跡	55	西ノ上遺跡	101	禪興寺跡	147	岩の前遺跡	193	馬川北遺跡
10	大久保C遺跡	56	川原遺跡	102	ダイジョウ寺跡	148	別所北遺跡	194	馬川遺跡
11	中家住宅	57	母山遺跡	103	上之郷遺跡	149	別所遺跡	195	下出北遺跡
12	大久保A遺跡	58	母山近世墓地	104	向井代遺跡	150	高野遺跡	196	室堂遺跡
13	五門北古墳	59	向井山遺跡	105	意賀美神社本殿	151	昭和池遺跡	197	平野寺(長楽寺)跡
14	五門遺跡	60	鏡塚古墳	106	向井池遺跡	152	上村遺跡	198	向出遺跡
15	五門古墳	61	梨谷遺跡	107	三軒屋遺跡	153	狐池遺跡	199	高田西遺跡
16	大浦中世墓地	62	笹ノ山遺跡	108	川原遺跡	154	上野中道遺跡	200	向山遺跡
17	大浦遺跡	63	土丸遺跡	109	岡田東遺跡	155	宮遺跡	201	高田南遺跡
18	甲田家住宅	64	土丸南遺跡	110	岡田遺跡	156	宮南遺跡	202	和泉鳥取遺跡
19	久保B遺跡	65	雨山城跡	111	氏の松遺跡	157	芋掘遺跡	203	雨山遺跡
20	鳥羽殿城跡	66	土丸城跡	112	座頭池遺跡	158	石ヶ原遺跡	204	内畑遺跡
21	墓の谷遺跡	67	下大木遺跡	113	岡田西遺跡	159	高倉山南遺跡	205	皿田池古墳
22	米迎寺本堂	68	大木遺跡	114	新伝寺遺跡	160	本田池遺跡	206	正方寺遺跡
23	池ノ谷遺跡	69	稲倉池北方遺跡	115	中小路北遺跡	161	上代石塚遺跡	207	西畑遺跡
24	成合寺遺跡	70	大西遺跡	116	中小路西遺跡	162	信之池遺跡	208	自然田遺跡
25	山ノ下城跡	71	松原遺跡	117	中小路遺跡	163	滑瀬遺跡	209	玉田山遺跡
26	山出遺跡	72	中開遺跡	118	坊主池遺跡	164	六尾遺跡	210	玉田山古墳群
27	上瓦屋遺跡	73	末廣遺跡	119	中小路南遺跡	165	六尾南遺跡	211	玉田山須恵器窯跡
28	湊遺跡	74	安松遺跡	120	北野遺跡	166	金熊寺遺跡	212	寺田山遺跡
29	壇波羅密寺跡	75	長滝遺跡	121	一岡神社遺跡	167	専徳寺遺跡	213	黒田西遺跡
30	壇波羅遺跡	76	植田池遺跡	122	海会寺跡	168	天神ノ森遺跡	214	鳥取北遺跡
31	佐野王子跡	77	郷ノ芝遺跡	123	海会寺瓦窯	169	キレト遺跡	215	鳥取遺跡
32	上町東遺跡	78	日根野遺跡	124	大苗代遺跡	170	高田遺跡	216	鳥取南遺跡
33	市場東遺跡	79	机場遺跡	125	仏性寺跡	171	男里北遺跡	217	黒田南遺跡
34	若宮遺跡	80	棚屋遺跡	126	海宮宮池遺跡	172	戎畑遺跡	218	神光寺(蓮池)遺跡
35	上町遺跡	81	羽倉崎東遺跡	127	市場遺跡	173	男里遺跡	219	三味谷遺跡
36	依屋遺跡	82	羽倉崎遺跡	128	向井山遺跡	174	光平寺跡	220	三升五合山遺跡
37	北尻遺跡	83	嘉祥神社本殿	129	新家遺跡	175	光平寺石造五輪塔	221	小口谷遺跡
38	岡口遺跡	84	道ノ池遺跡	130	下村遺跡	176	樽井南遺跡	222	井関遺跡
39	中嶋遺跡	85	羽倉崎上町遺跡	131	下村北遺跡	177	男里東遺跡	223	石田山遺跡
40	小塚遺跡	86	船岡山遺跡	132	下村1号墳	178	長山遺跡	224	西鳥取遺跡
41	十二谷遺跡	87	岡本庵寺	133	新家オドリ山東遺跡	179	山ノ宮遺跡	225	戎遺跡
42	丁田遺跡	88	田尻遺跡	134	新家オドリ山遺跡	180	前田池遺跡	226	貝掛遺跡
43	新池尻遺跡	89	船岡山南遺跡	135	下村2号墳	181	幡代遺跡	227	金剛寺遺跡
44	大坪遺跡	90	夫婦池遺跡	136	新家古墳群	182	幡代南遺跡	228	塚谷古墳群
45	市堂遺跡	91	樫井西遺跡	137	新家オドリ山南遺跡	183	奥ノ池遺跡		
46	北ノ前遺跡	92	藤波遺跡	138	フキアゲ山西遺跡	184	林昌寺跡		



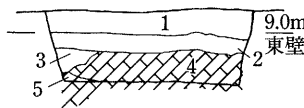


P L. 3 男里遺跡、戎畑遺跡、幡代遺跡、岡中遺跡、中小路西遺跡調査区



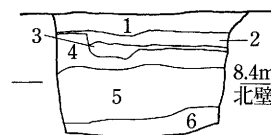
- 1.淡黄灰色礫混砂質土
- 2.暗黒灰色礫混土
- 3.淡灰色混じり暗黄褐色土
- 4.褐色砂礫

ON04-3区断面図



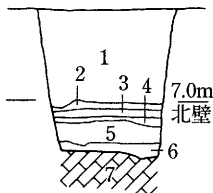
- 1.盛土
- 2.淡灰褐色礫混土 (下部還元)
- 3.淡暗灰褐色礫混砂質土
- 4.にぶい暗黄褐色粘土
- 5.にぶい暗黄褐色礫混粘土

ON04-2区断面図

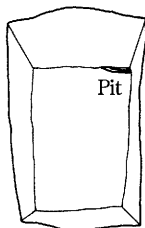


- 1.表土 (耕作土含)
- 2.暗橙色混じり暗灰褐色砂質土
- 3.灰褐色混じり橙色土
- 4.暗灰色砂質シルト
- 5.暗オリーブ色砂質シルト
- 6.淡オリーブ色礫混粘土

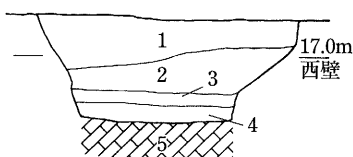
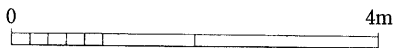
ON04-1区断面図



- 1.盛土
- 2.暗橙色混じり
淡灰褐色砂質土
- 3.暗灰褐色土 (旧耕作土)
- 4.暗褐色混じり暗灰褐色土
- 5.淡暗灰褐色土 (旧耕作土)
- 6.暗褐色粘質土 (遺構埋土)
- 7.暗黄褐色粘土

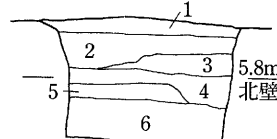


EB04-1区平面図及び断面図



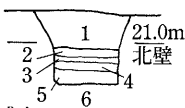
- 1.盛土
- 2.茶褐色礫混シルト
- 3.黒褐色シルト
- 4.黒褐色礫混シルト
- 5.黄褐色礫混シルト

ON03-8区断面図



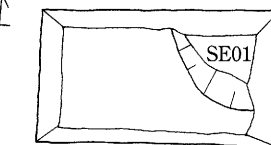
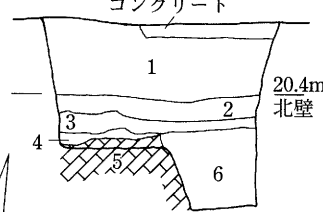
- 1.灰黒色土 (耕作土)
- 2.橙色混じり暗灰褐色砂質土
- 3.暗褐色混じり暗灰褐色砂質土
- 4.暗灰褐色混じり暗褐色砂質土
- 5.明橙色砂質土
- 6.淡灰褐色砂礫

ON04-4区断面図



- 1.盛土
- 2.灰色混じり暗褐色土
- 3.淡黄灰色砂質土
- 4.淡灰褐色土 (旧耕作土)
- 5.黄白色砂質土
- 6.暗褐色混じり暗灰色礫混粘土

HT04-2区断面図



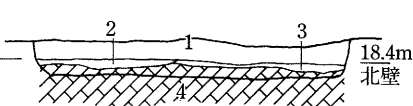
- 1.表土及び盛土
- 2.暗灰褐色砂質土 (耕作土)
- 3.暗灰褐色混じり淡橙色土
- 4.暗灰白色シルト
- 5.淡暗黄褐色粘土
- 6.暗青灰色粘土 (遺構埋土)

HT04-1区平面図及び断面図

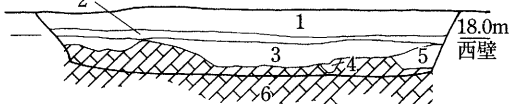


- 第7トレンチ
- 1.灰黒色土 (耕作土)
 - 2.橙色混じり明灰褐色砂質土
 - 3.灰褐色混じり橙色粘土
 - 4.淡暗褐色粘土
 - 5.暗黄褐色粘土

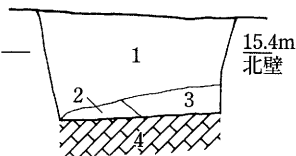
HT04-4区断面図



- 第1トレンチ
- 1.灰黒色土 (耕作土)
 - 2.橙色混じり淡灰褐色土
 - 3.暗黄褐色ブロック混じり暗褐色粘土
 - 4.暗黄褐色礫混粘土

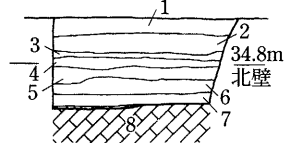


- 第4トレンチ
- 1.灰黒色土 (耕作土)
 - 2.灰褐色混じり橙色シルト
 - 3.暗灰褐色シルト (橙色粒、暗褐色粒多含)
 - 4.暗黄褐色混じり暗褐色粘土
 - 5.暗黄褐色ブロック混じり淡暗褐色シルト
 - 6.暗黄褐色シルト



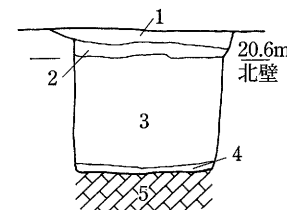
- 1.盛土
- 2.暗黄褐色土 (盛土)
- 3.耕作土と地山の攪乱
- 4.暗黄褐色混じり淡灰白色粘土

NKW04-1区断面図



- 1.表土及び盛土
- 2.淡灰褐色砂質土 (旧耕作土)
- 3.淡灰褐色混じり淡橙色土
- 4.灰白色砂質土 (旧耕作土)
- 5.淡黄灰色土
- 6.淡灰褐色混じり淡黄色砂質土
- 7.淡暗褐色粘土 (黄色粒多含)
- 8.淡黄褐色シルト

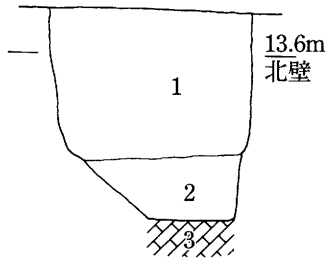
OK04-1区断面図



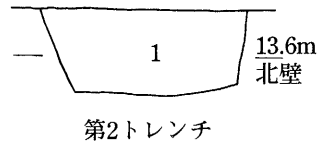
- 1.盛土
- 2.暗灰褐色シルト (耕作土)
- 3.暗淡黄色土
- 4.淡灰色粘土
- 5.暗灰褐色砂礫

HT04-3区断面図

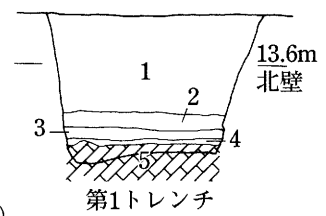
P L. 4 岡田西遺跡、新伝寺・北野遺跡①、一岡神社遺跡、海会寺跡調査区



1.盛土
2.淡灰褐色シルト
3.橙色混じり淡灰白色粘土
IOJ04-1区断面図



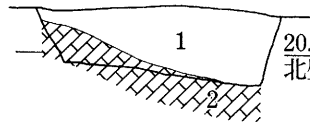
第2トレンチ



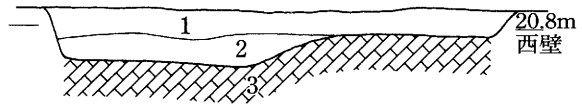
第1トレンチ

- 1.盛土
2.灰黒色土（耕作土）
3.淡黄色混じり淡灰白色土
4.淡暗褐色土（地山ブロック含）
5.淡灰白色粘土

OKDW04-1区断面図



第9トレンチ
1.旧耕作土
2.明褐色礫混シルト

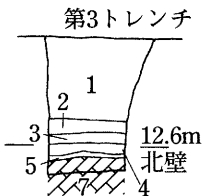


第2トレンチ
1.盛土及び旧耕作土
2.明褐色砂
3.明灰褐色礫混シルト

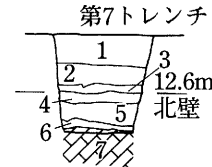
KAI04-1区断面図

- 1.盛土
2.灰黒色土（耕作土）
3.淡黄褐色シルト
4.灰黄褐色砂質土（旧耕作土）
5.褐色混じり灰褐色砂質土（旧耕作土、Mg多含）
6.灰褐色混じり橙色砂質粘土
7.淡黄褐色砂質粘土

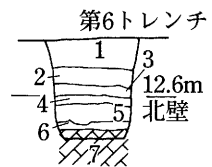
SDJ・KT04-1区第3～7トレンチ
平面図及び断面図



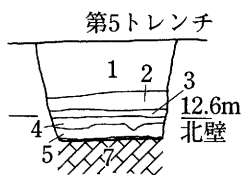
第3トレンチ



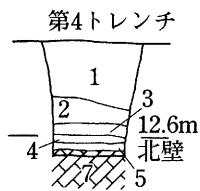
第7トレンチ



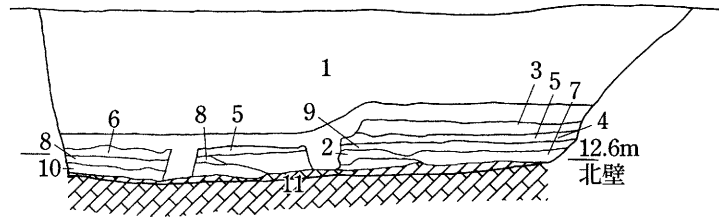
第6トレンチ



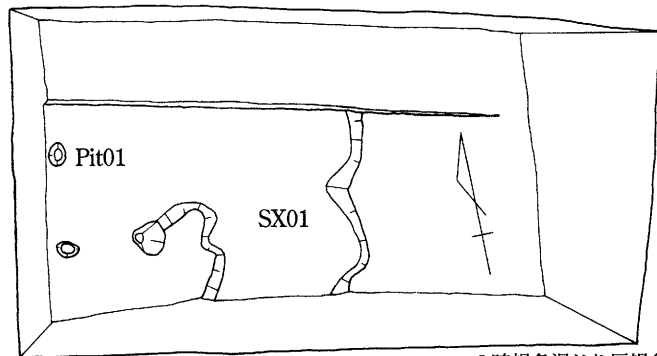
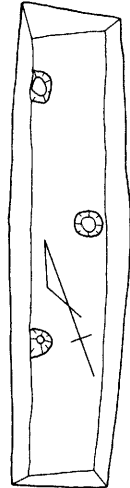
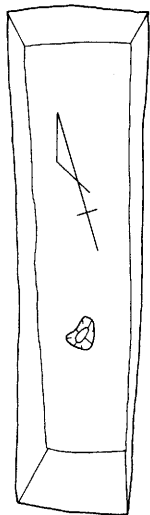
第5トレンチ



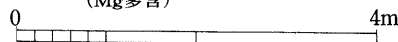
第4トレンチ

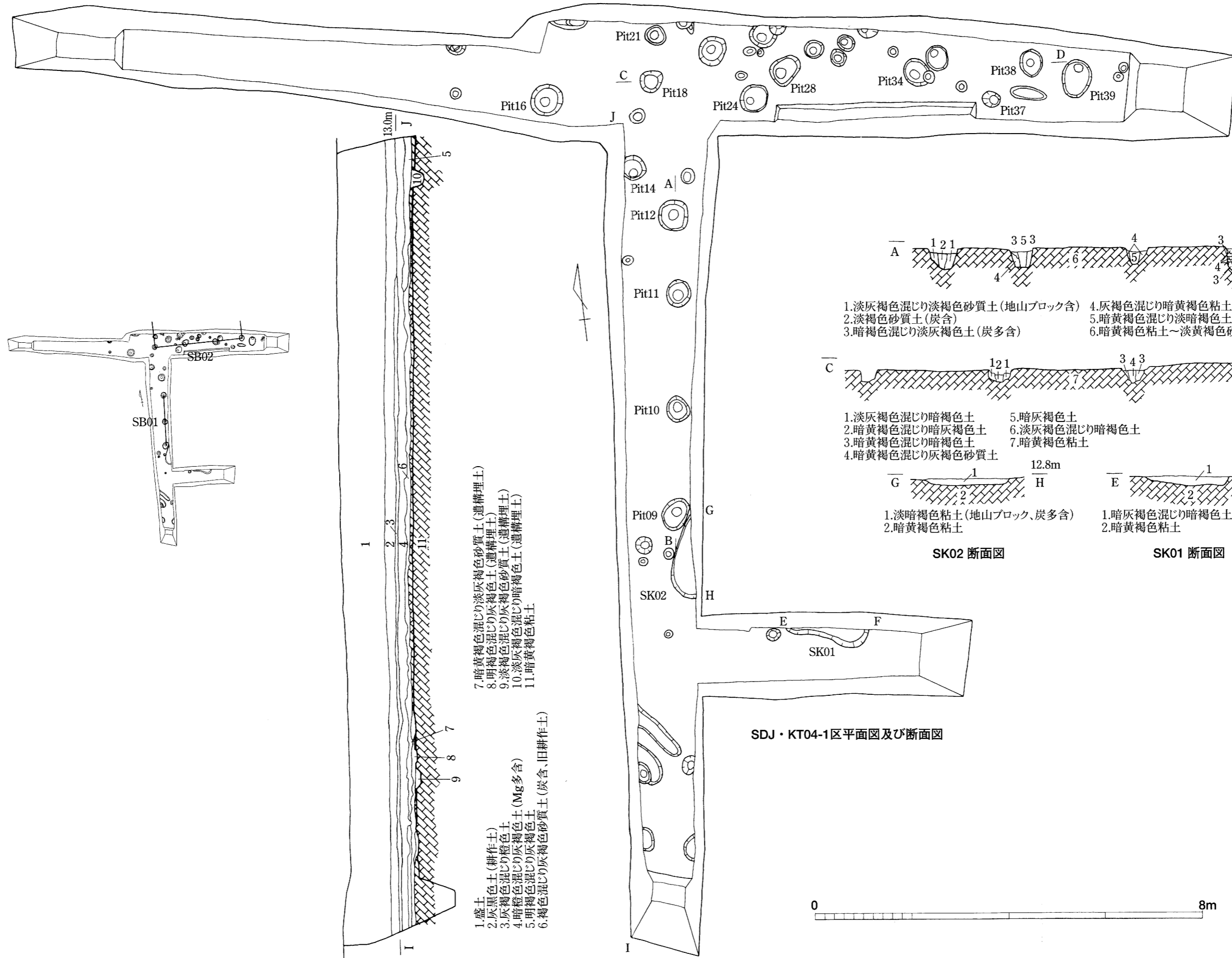


SDJ・KT04-1区第2トレンチ平面図及び断面図



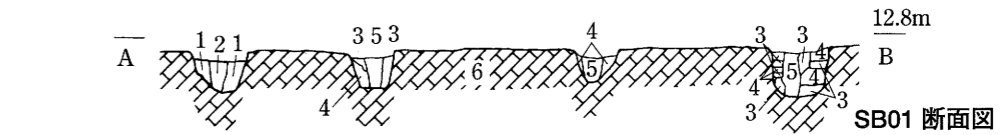
- 1.盛土
2.暗灰色土（耕作土）
3.灰色混じり暗褐色土
4.橙色混じり灰褐色土
5.褐色混じり灰褐色土
6.淡黄灰褐色砂質土
7.褐色混じり灰褐色砂質土
8.暗褐色混じり灰褐色砂質土（Mg多含）
9.暗褐色混じり灰褐色砂質土（橙色ブロック含）
10.暗褐色混じり灰褐色シルト
11.淡黄褐色粘土



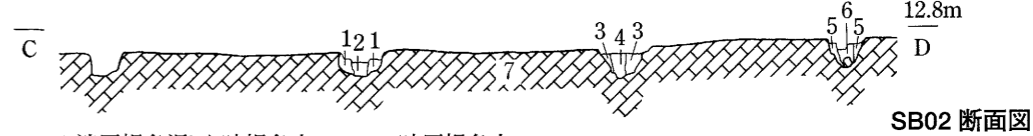


- 7. 暗黄褐色混じり淡灰褐色砂質土 (遺構埋土)
- 8. 明褐色混じり灰褐色土 (遺構埋土)
- 9. 淡褐色混じり灰褐色砂質土 (遺構埋土)
- 10. 淡灰褐色混じり暗褐色土 (遺構埋土)
- 11. 暗黄褐色粘土

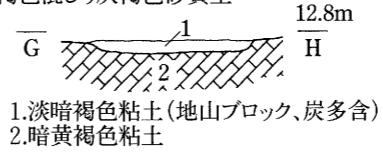
- 1. 盛土
- 2. 灰黒色土 (耕作土)
- 3. 灰褐色混じり橙褐色土
- 4. 暗橙褐色混じり灰褐色土 (Mg多含)
- 5. 明褐色混じり灰褐色土
- 6. 褐色混じり灰褐色砂質土 (炭含、旧耕作土)



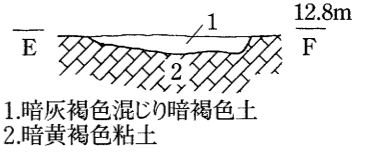
- 1. 淡灰褐色混じり淡褐色砂質土 (地山ブロック含)
- 2. 淡褐色砂質土 (炭含)
- 3. 暗褐色混じり淡灰褐色土 (炭多含)
- 4. 灰褐色混じり暗黄褐色粘土 (地山ブロック含)
- 5. 暗黄褐色混じり淡暗褐色土 (炭含)
- 6. 暗黄褐色粘土~淡黄褐色砂礫



- 1. 淡灰褐色混じり暗褐色土
- 2. 暗黄褐色混じり暗灰褐色土
- 3. 暗黄褐色混じり暗褐色土
- 4. 暗黄褐色混じり灰褐色砂質土
- 5. 暗灰褐色土
- 6. 淡灰褐色混じり暗褐色土
- 7. 暗黄褐色粘土

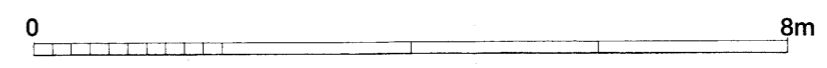


- 1. 淡暗褐色粘土 (地山ブロック、炭多含)
- 2. 暗黄褐色粘土



- 1. 暗灰褐色混じり暗褐色土
- 2. 暗黄褐色粘土

SDJ・KT04-1区平面図及び断面図

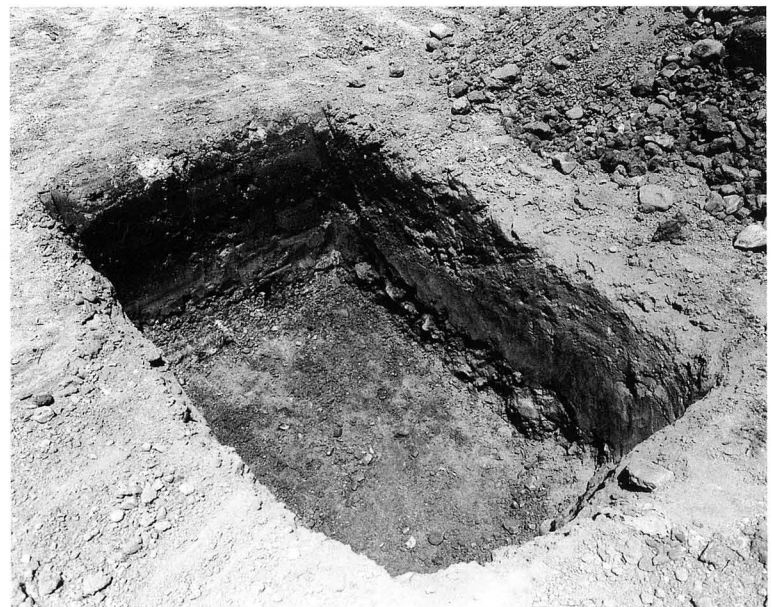




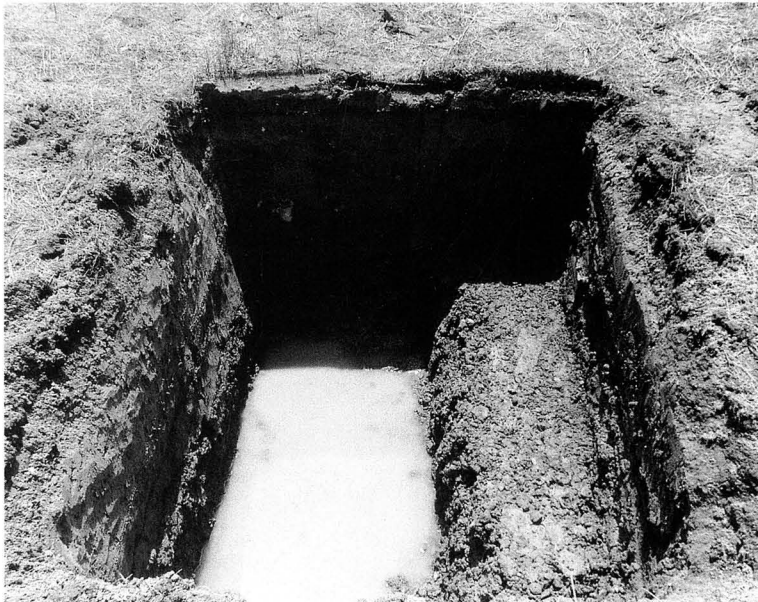
ON04-1区
(南東から)



ON04-2区
(南西から)



ON04-3区
(南西から)



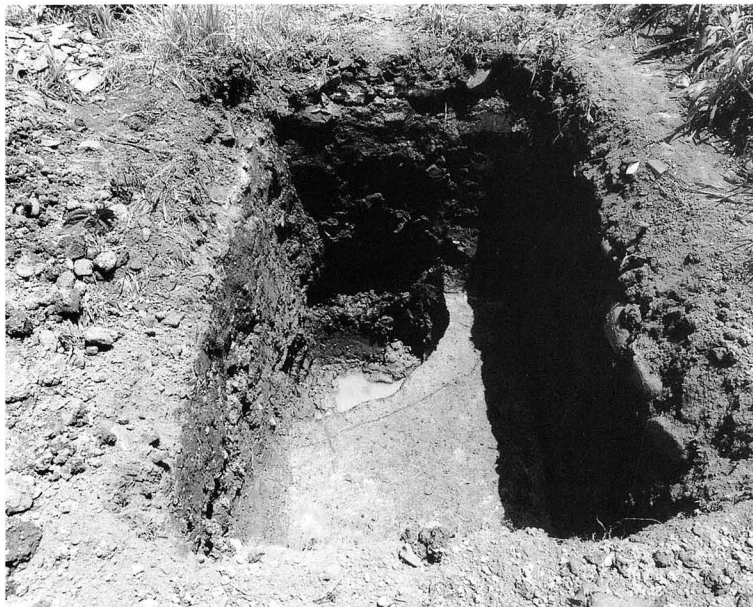
ON04-4区
(西から)



ON03-8区
(北東から)



EB04-1区
(南西から)



HT04-1区
(西から)



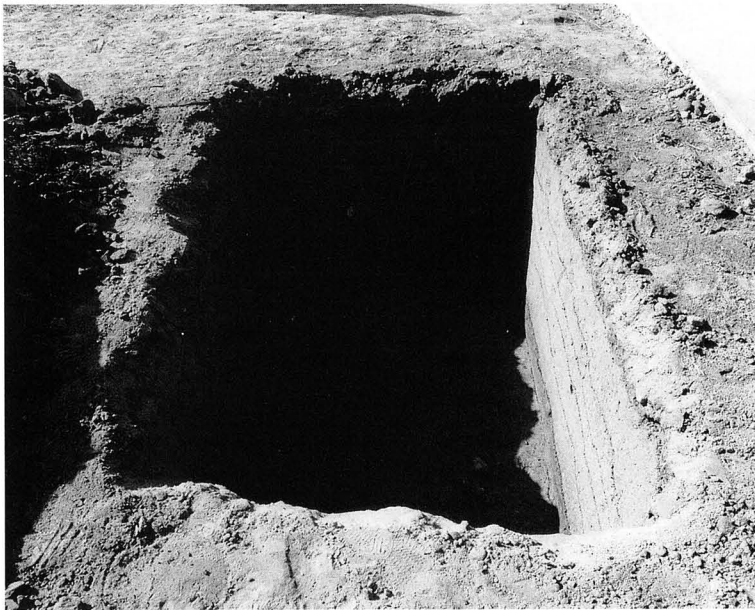
HT04-2区
(南から)



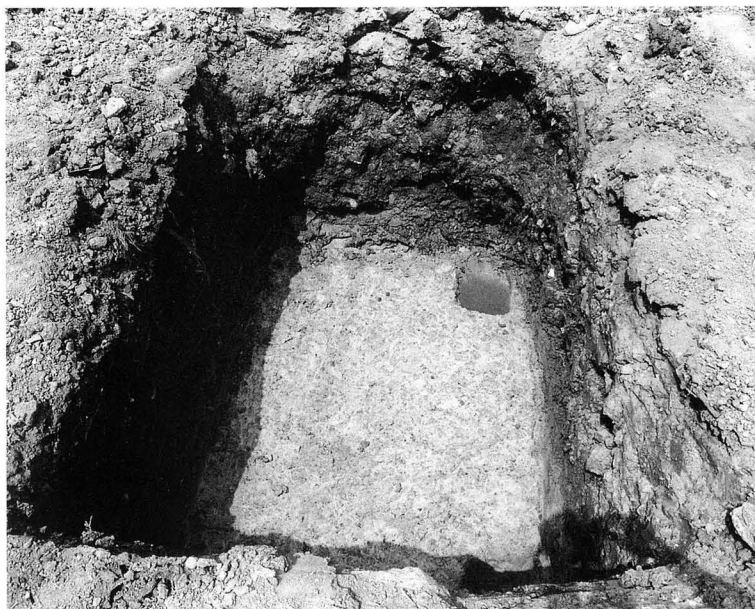
HT04-3区
(南西から)



HT04-4区
第1トレンチ
(南から)



HT04-1区
(東から)



NKW04-1区
(東から)



OKDW04-1区
第1トレンチ
(南西から)



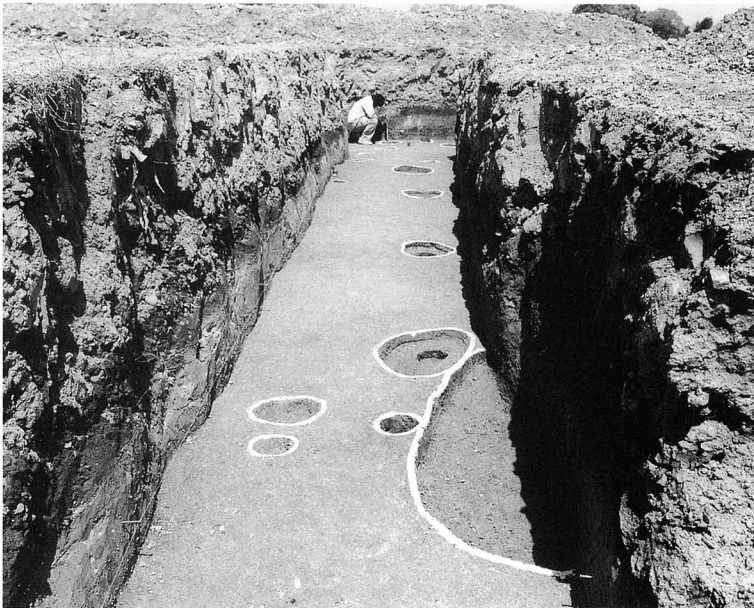
IOJ04-1区
(西から)



KAI04-1区
第2トレンチ
(南西から)



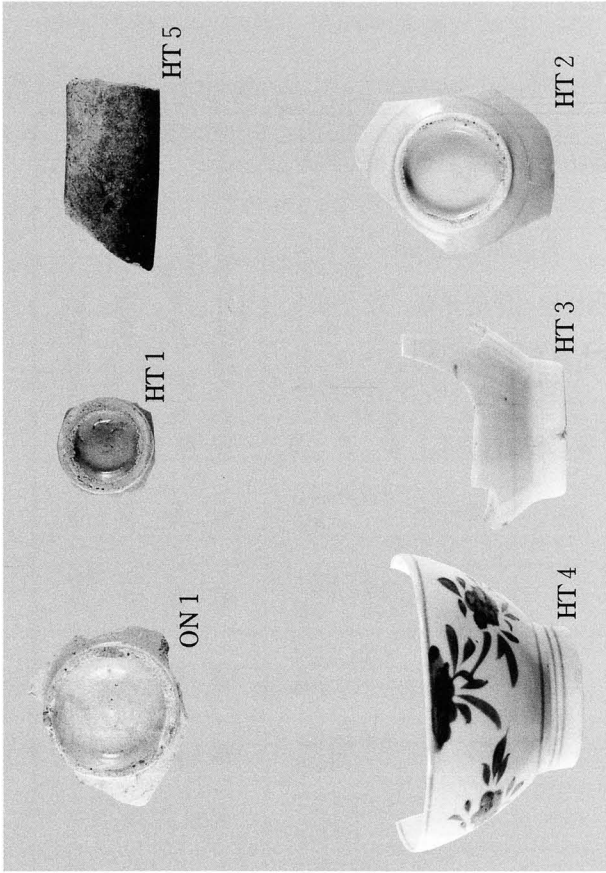
S D J ・ K T 0 4 - 1 区
第 1 トレンチ S B 0 2
(南西から)



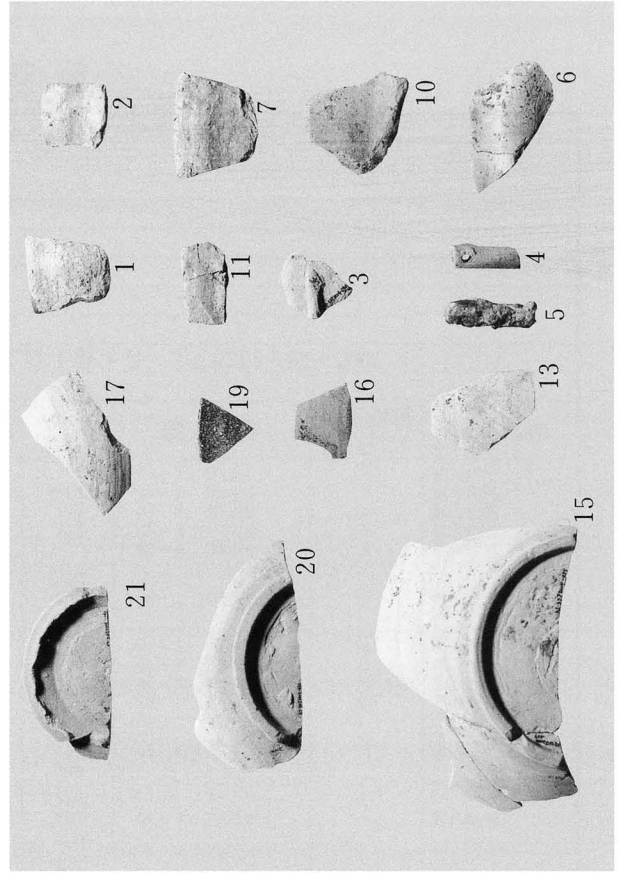
S D J ・ K T 0 4 - 1 区
第 1 トレンチ S B 0 1 ・ S K 0 2
(南から)



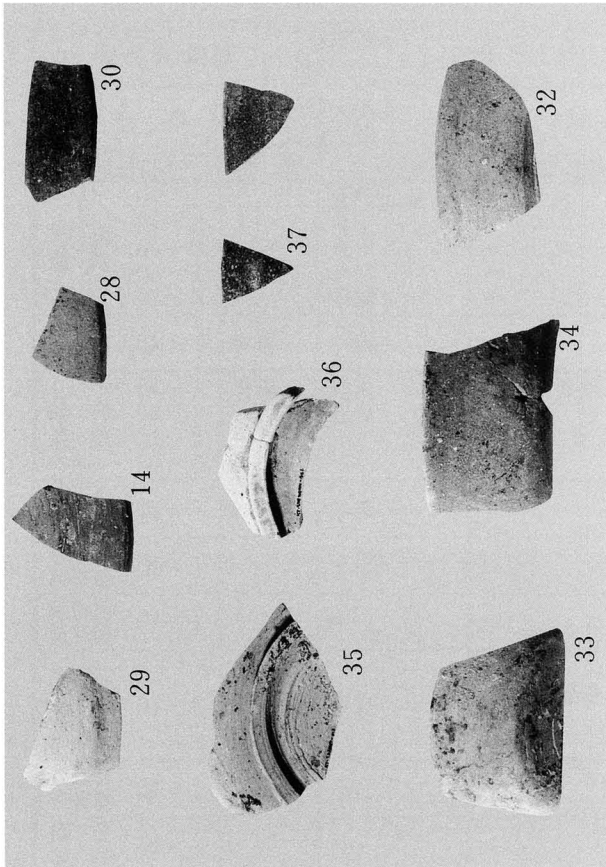
S D J ・ K T 0 4 - 1 区
第 2 トレンチ
(北東から)



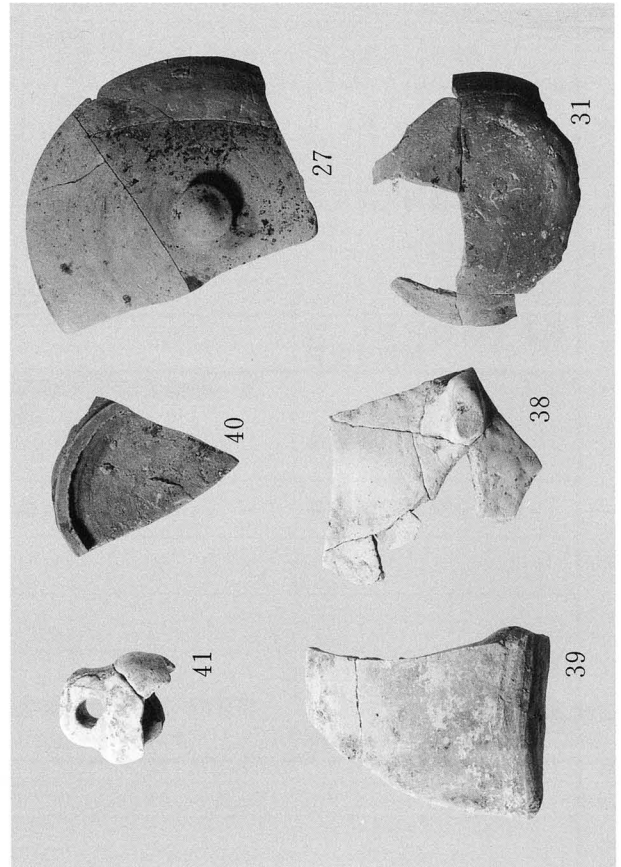
ON03-8区 HT04-1・2区



SDJ・KT04-1区①



SDJ・KT04-1区②



SDJ・KT04-1区③

報告書抄録

ふりがな	せんなんし いせきぐん はっくつちょうさほうこくしょ 22							
書名	泉南市遺跡群発掘調査報告書							
副書名	-							
巻次	XXII							
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第44集							
編著者名	石橋広和・城野博文・河田泰之							
編集機関	泉南市教育委員会							
所在地	〒590-0592 大阪府泉南市榎井1丁目1番1号 Tel.0724-83-0001							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
おのさと 男里遺跡	おのおかふせんなんし 大阪府泉南市 男里	27228	ON	34度 21分 41秒	135度 15分 30秒	04-1 200407 04-2 200405 04-3 200407 04-4 200406 03-8 200401	3 3 4 3 5	個人住宅 個人住宅 個人住宅 個人住宅 個人住宅
えびす 戎畑遺跡	おのおかふせんなんし 大阪府泉南市 榎井	27228	EB	34度 22分 07秒	135度 15分 29秒	04-1 200408	4	個人住宅
はたしろ 幡代遺跡	おのおかふせんなんし 大阪府泉南市 幡代	27228	HT	34度 21分 20秒	135度 15分 58秒	04-1 200405 04-2 200408 04-3 200411 04-4 200405	4 2 3 47	個人住宅 個人住宅 個人住宅 宅地造成
おかなか 岡中遺跡	おのおかふせんなんし 大阪府泉南市 信達岡中	27228	OK	34度 21分 02秒	135度 16分 28秒	04-1 200412	3	個人住宅
なこうじにし 中小路西遺跡	おのおかふせんなんし 大阪府泉南市 信達市場	27228	NKW	34度 22分 26秒	135度 16分 52秒	04-1 200407	4	個人住宅
おかだし 岡田西遺跡	おのおかふせんなんし 大阪府泉南市 中小路	27228	OKD	34度 22分 38秒	135度 16分 35秒	04-1 200410	6	店舗
しんでん 新伝寺遺跡	おのおかふせんなんし 大阪府泉南市 北野	27228	SDJ	34度 22分 45秒	135度 17分 02秒	04-1 200404	146	店舗
きたの 北野遺跡	おのおかふせんなんし 大阪府泉南市 北野	27228	KT	34度 22分 33秒	135度 17分 05秒			
いちおかじんじや 一岡神社遺跡	おのおかふせんなんし 大阪府泉南市 北野	27228	IOJ	34度 22分 42秒	135度 17分 15秒	04-1 200410	3	事務所
かいえしあと 海会寺跡	おのおかふせんなんし 大阪府泉南市 信達大苗代	27228	KAI	34度 22分 31秒	135度 17分 20秒	04-1 200409	34	共同住宅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
男里遺跡	04-1 04-2 04-3 04-4 03-8	近代以前	-	-	-	-	-	男里川旧河道？
戎畑遺跡	04-1	集落	不明	ピット	-	-	-	95-1区に対応する遺構面を確認
幡代遺跡	04-1 04-2 04-3 04-4	田畑	近世 近世	灌漑用井戸	陶磁器、土師質炮烙、瓦 陶器	-	-	金熊寺川氾濫原
岡中遺跡	04-1	田畑	中世	-	土師器	-	-	複数の耕作面を確認
中小路西遺跡	04-1		-	-	-	-	-	
岡田西遺跡	04-1		-	-	-	-	-	
新伝寺・北野遺跡	04-1	集落	奈良・平安	堀立柱建物、土杭	須恵器、土師器、鉄製品	-	-	榎井川流域に展開する古代集落の確認 海会寺跡と関係するものか？
一岡神社遺跡	04-1		-	-	-	-	-	
海会寺跡	04-1		-	-	-	-	-	

泉南市遺跡群発掘調査報告書XXII

泉南市文化財調査報告書 第44集

2005年3月31日

編集・発行 大阪府泉南市教育委員会

泉南市樽井1丁目1番1号

Tel.0724-83-0001

印刷 有限会社ヌノタ印刷工房

泉南市新家4509-4.1-205

Tel.0724-80-2760

